今世

歐洲外交史

1300
~~1299~~
~~1281~~

414
A 900
1

宮内省圖書寮

歐洲外交史

第二卷 革命

第一章 歐洲ノ動揺（自一八四八年至一八四九年）

○(一)佛國ノ形勢並ニラマルチースノ宣言書○(二)歐洲全般ノ騒擾○(三)日耳曼及ビ伊太利ノ革命○(四)日耳曼帝國勃興ノ初歩○(五)墺國フランクフォール議會及ビ日耳曼帝國ノ總督○(六)伊太利ノ自營（ピエモンテ）、キエストザーノ役○(七)「スラヴ」人ト洪加利人トノ中間ニ於マレタル維納政府○(八)マルモー會ノ議ヨリフランクフォール會議ニ至ル○(九)維納ノ革命（一八四八年十月）○(十)羅馬ノ革命（一八四八年）○(十一)スワルゼンベルグノ初政○(十二)伯林政府及ビガゼルンノ改策○(十三)墺

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

普二國ノ間ニ於ケル外交ノ競爭○(十四)マジニー
ピー九世及ビシヤルゝザルベール○(十五)一八四九年
ノ日耳曼憲法○(十六)露國ノ出兵○フレデリツ
クゝギーオームノ退讓○(十八)佛朗西共和國及ビ
羅馬共和國

(一)

一八四八年及ビ一八四九年ノ二年間ハ外交ハ
左シテ其ノ用ヲ為スコト能ハザリキ是ノ時ニ
分リ凡ソ列國政府ノ政策ハ一ニ皆戰ノ勝敗
如何ニ關シ當時ノ所謂出來事ナル者ハ政治家
ノ施設ニ由リテ生スルニアラスシテ偏ヘニ人民ノ
動靜ニ由リテ發スル所ノ現象ニ外ナラザリキ
往キニ維納會議ニ於テ辛ラシテ建設シタル
列國ノ政制ハ殆ムド歐洲全般ニ亘レル革命
ノ為メニ突如トシテ將ニ潰崩ニ帰セムトシ而
シテ其潰崩半ハニシテ止マリ者ハ蓋シ諸國
民ノ間ニ合同ヲ保ツノ難キコト。(宛モ諸國ノ連ノ間ニ合同ヲ保ツ難キト。)
ムバアラズヤキズ今夫レ一八一五年ニ於テハ自家
ノ運命ニ就キテ曾テ其ノ議ニ與カルヲ得ザリ
般ナリシニ由ラス

シ諸國ノ人民ハ一八四八年ニ至リテ自ラ其ノ發言ノ權利ヲ占取セリ而モ彼等ノ無識ナルト彼等ノ相互ニ猜忌ノ念ヲ有スルト彼等ノ手ニ由リテ急遽ノ間ニ設立セラレタル政府カ經驗ヲ欠ケルトハ彼等ノ君主ヲシテ彼等ノ口ヲ箝スルコトヲ得セシメタリ彼等カ其自由權ヲ得ルカ為メニ起シタル十字軍ハ寔ニ失敗ニ外ナラサリシモ而モ彼等ハ其ノ月ノ失敗ニ由リテ毫モ其ノ氣力ヲ沮喪スルコトアラザリキ而シテ彼等カ此ノ危機ニ際シテ提起シタル重要ノ諸問題ハ其ノ後チニ至リテ既ニ之レカ解釋ヲ終レル者アリ而シテ其ノ未タ解釋ヲ終ラサル者ニ就キテハ今日ニ於テモ彼等ハ尚ホ之レカ解釋ニ熱中シツヽアルナリ

二月二十四日巴里ノ事變後ハ列國ノ政事家皆齊シク其ノ餘波ノ施キテ歐洲全土ヲ震動スルニ至ルベキヲ憂カリ佛國ヲ以テ革命ノ源泉ナリトシテ大ニ之ヲ恐怖セリ蓋シ佛國ニ於テハ多年ルイ、フイリップノ為メニ抑壓セラレタル革命ノ氣燄カコノ時ニ至リ遂然トシテ破裂シタル者ニシテ其ノ一メヒ破裂スルヤ洪水ノ横流氾溢スルカ如ク妨礙ニ逢フコトナクシテ忽チ八方ニ傳播シ前キノ富豪的君主政ハ一朝ニシテ變シテ純然タル民主政トナリ布ク普通選擧ノ制度ヲ以テシタリ乃チ佛國民主党ノ領袖タル者其ノ多年ノ素論

ニ本キ諸國ノ人民ヲ援ケテ齊シク其ノ專
制ノ羈絆ヲ脫セシメ遂ニ以テ一八一五年ノ條
約ヲ破壞セムコトヲ計ルハ理當ニ然ルベキ所
ニシテ當時世人モ亦一般ニ其ノ然ルベキヲ思
料シタリ且ツ佛國ノ假政府ハ前王室ノ如ク
カメテ無為ヲ計リ苟安ヲ偷ムノ事由ヲ有
セズ當時專制ニ苦メル諸國ノ人民ハ皆其
ノ聲ニ應シテ蹶起セムトスルノ狀アルヲ以テ
佛國一タビ事ヲ舉クルトキハ其ノ勝利亦
甚ダ難シトセス況ムヤ當時佛國ニ於テ
神聖同盟ニ對シ復讐ノ師ヲ興スハ嘗テ一
八三〇年ニ於ケルト均シク國内人望ヲ收ム
最良手段ニシテ又且ツ專ラ暴激ナル言行

ヲ事トシテ第二共和政ニ彼レガ如キ煩累
ヲ與ヘ遂ニ以テ第二帝政ノ成立ヲ馴致シタル
過激民主党ヲシテ其氣燄ヲ外ニ發洩セ
シムル所以ナルヤ故ニ當時假政府ノ閣員
中ニハ之ニ憑カル所アリテ師ヲ外國ニ出サム
ト欲シタル者ナキニアラス然レドモ他ノ閣
員ハ更ニ以為ヘラク吾等ハ未ダ國民ヨリ正
當ハ委任ヲ受ケズシテ假リニ國政ヲ司ル者
ニ過キズ假令ヒ其ノ意思ハ何カニ醇正ナリ
トスルモ奈何ゾ輕ロク國家ノ興廢安危
榮辱ヲ賭シテ外國ト戰ヲ開クガ如キ大
事ヲ決行スルヲ得ムヤト且ツ彼等ハ猥カニ
政治ノ衝ニ當リテ内政外交殆ムド得共通

曉スル所ナリ加フルニルイ、フイリップ時代ノ常
備軍ハ其兵員甚タ寡クシテ其精鋭ナル者
ハ遠クアルゼリーニ在セルヲ以テ今俄カニ外
敵ノ師ヲ興コスハ到底其ノ能クスル所ニアラズ
假令ヒ或ハ然ラズトスルモ今倘シ其ノ兵ヲ白
耳義ニ進ムルトキハ必スヤ更ニ英國ノ怨ヲ
深クセザルベカラズ或ハ然ラズシテ轉シテ某
國ノ方面ヲ侵カストキハ必ズヤ日耳曼人民
ノ怒ヲ招クコト一八四〇年ニ於ケルガ如クナ
ラサルベカラス將タ諸國民ノ獨立權ハ皆
齊シク敬重セサルベカラズト雖ドモ之ヲ
援ケテ皆齊シク其獨立ヲ得セシムルハ未タ
必ズシモ佛國ニ益スル所アルベキニアラズ彼

ノ伊太利人及日耳曼人ノ如キ之ヲ援ケテ其
ノ統一ノ望ヲ達セシムルカ如キ是豈ニ佛國
ハ自ラ其ノ力ヲ勞シテ將来自國ノ勁敵タル
ベキ二大強國ヲ建設スル所以ニアラズヤ
右ノ如クナルヲ以テ佛國ノ假政府ハ反覆考
慮ヲ盡シ以テ列國ニ對シテカメテ
平和ノ態度ヲ取リ而シテ之ト同時ニ列國ヲ
シテ自國ノ權利ヲ敬重セシムルノ意思ト独
立ヲ計リ自由ヲ求ムル諸國民ニ對スル同
情トヲ表明スルニ如カスト思料シ二月二十四日
ノ事變以来新タニ外務長官トナレルラマルチ
ーヌハ三月五日ヲ以テ厳カニ中外ニ向ヒテ一ノ
宣言書ヲ發シタリシガラマルチーヌハ元来外

交家ニアラズシテ一代ノ大詩人ナルヲ以テ其宣言書ハ措辞甚ダ優麗高雅ニシテ欧洲列国ノ間ニ至大ノ反響ヲ惹キタリ彼レハ宣言書ノ冒頭ニ於テ『佛國ニ於テ共和政体ヲ設クコトヲ布告シタルハ決シテ世界ニ於ケル自餘ノ政体ヲ敵視スルノ行為ニアラザルコトヲ揭言シ且ツ云ク『戦ハ佛朗西共和國ノ青義トスル所ニアラズ彼レハ他國ヨリ戦ヲ挑ムトキハ之ニ慙ブルコトヲ辞セスト雖トモ敢テ自ラ進ミテ戦ヲ求ムル者ニアラス』ト彼レハ明カニ一八一五年ノ條約ヲ刺斥シ『新政府ヨリ視ルトキハ該條約ハ當然成立セザル者ナリ』ト稱シ『然レトモ該條約ニ於テ定メタル國土ノ經界ニ就キテハ敢テ異議ヲ唱フルコトナク新政府ハ外國間ノ交渉ニ於テ之ヲ基本トナスベシ』ト言ヘリ然レドモラマルチーヌハ又『若シ神ノ宣示ニ由リテ羅政巴若クハ自餘ノ諸國ニ於テ専制ニ苦メル人民カ其ノ獨立ヲ計ルノ時機ニ際會セルヲ知ラバ若シ瑞西或ハ意太利カ外来ノ干渉ノ為メニ其ノ内政ノ改革ヲ妨害セラルヽカ如キコトアラハ『佛朗西共和國ハ其ノ正當ナル運動ヲ援クルカ為メニ兵力ヲ用ラルノ權利ヲ有セリ』ト公言シ遂ニ下ノ如キ言ヲ為シテ諸國ノ君主ニ對シテ聯カ脅迫ヲ加ヘ以テ其ノ宣言ノ結尾ヲナセリ云ク『佛朗西共和国ハ外國ニ対シテ敢テ其ノ抱持スル民主青義ヲ隠

敵スル者ニアラス彼レハ何人ト雖モ猥リニ人民ノ
自由ニ手ヲ觸ル、コトヲ許サズ彼ハ彼ト同一ノ
吉義ヲ取ラムコトヲ欲スル諸國民ノ一切ノ權
利、一切ノ進歩、一切ノ改革ノ信切ナル同盟タルコトヲ
告白ス彼レハ隣カニ其ノ隣國ノ人民ヲ煽動シテ乱
ヲ起サシメント欲スルモノニアラス然レトモ彼レハ其
思想ノ光輝ニ由リ其平和ト一秩序トノ実例ヲ
示シテ世界ノ民ヲシテ皆均シク自己ノ吉義ニ賛
同セシメント欲ス是戰ニアラスシテ自然ノ道ナリ是
レ火ヲ放チテ世界ヲ焚燒スルニアラスシテ燈ヲ掲
ケテ諸國民ヲ照ラシ以テ之ヲ指導スル者ナリ凡ト

(二)

列國ノ君主ハ云々ルチーヌノ右ノ宣言ヲ視ルモ未
ダ俄カニ佛國ニ対シテ其ノ心ヲ安ムスルコト能ハス
當時英國ノミハルイト、フイリップノ其ノ位ヲ失ヘ
ルヲ喜ビ仏國カ自再義ヲ併スルノ意ナキヲ知リ
テ容易ニ其ノ新政府ヲ公認セリト雖モ自餘ノ諸
國ハ當初之ニ対シテ痛ク猜疑ノ念ヲ抱キテ容易
ク新政府ヲ公認スルヲ肯ムセズ然レドモ彼等ガ相
俱ニ力ヲ戮セテ仏國ニ當ルノ策ヲ定ムルニ先チ
テ軍余ノ火燄ハ既ニ諸國ノ間ニ蔓延シ諸國
ノ君主ハ各々其ノ國内ノ騒乱ヲ鎮靡スルニ急
ニシテ復タ他ヲ顧ミルニ暇アラザリキ
勿論其ノ騒擾ハ國ニ由リテ大小ノ差長短ノ別
ナキニアラズ既ニ其臣民ニ幾多カ自由ノ權利
ヲ附與シタル国ニ在リテハ民家ノ暴行甚シキ

ニ至ラスシテ其政府モ亦民衆ノ脅迫ヲ受クルノ患アルコナシ例セバ瑞雲ニ於テハ當時復タ外國ノ干渉ヲ受クルノ恐レナキヲ以テ平穏ノ間ニ能ク其ノ憲法ノ改正ヲ遂ゲテ恰モ北米合衆國ニ均シキ政府ヲ設ケ白耳義及ビ和蘭ニ於テハ其ノ君主能ク臣民ノ輿望ヲ容レテ其ノ國政ヲ改革シ未タ大ニ其ノ門戸ヲ開放シテ民主自義ヲ容納スルニ至ラザルモ其ノ改革ハ亦能ク當時ノ人心ニ滿足ヲ與フルコトヲ得英國ニ於テハ青年愛蘭土党ノ陰謀ノ為メ輒チ民心ニ動揺ヲ與ヘタルモ政府ノ毅然タル態度ヲ議會ノ施コセル果断ナル處分トハ日ナラスシテ能ク其ノ平和ヲ回復シ西班牙ニ於テハ數月前ニ再ビ首相ニ任シタルナルヴエズノ厳励ナル政令ニ向テ啻ダニ以テ急進党ノ跳梁ヲ制止シタルノミナラズ又能クドン、カルロー、ノ党與ノ所在ニ蜂起セルヲ鎮壓シテ其ノ志ヲ逞クスルコトヲ能ハザラシメタリ之ニ反シテ其ノ人民ガ多年壓制ニ苦メル露西亞ニ於テハ革命ノ氣勢一層猛烈ヲ加ヘタリシガ是亦土地ニ雪ヲテ其ノ成敗ノ跡ヲ異ニシ波蘭土ノ如キハ當時ニ於テモ亦復起シテ其ノ獨立ヲ回復セムコトヲ計リタルモ數週間ヲ出デズシテ露墺普三國ノ鎮壓スル所トナレリ独リ伊太利及ビ日耳曼ニ於テハ之ト大ニ其ノ趣ヲ異ニシテ革命ノ勢力最モ強烈ヲ極メ容易ニ之ヲ鎮定ニ帰スルコト能ハザリキ

伊太利ニ於テハ巴里ニ於ケル事変ニ先チテ既ニ其政治上ニ大変革ヲ映フルノ兆候ヲ現ハシタレバ佛國ガ新タニ共和政ヲ設立セルヲ視テ人民皆歓喜シテ大ニ之ヲ稱讃シ此ノ時ニ至ルマテ尚ホ未ダ其ノ臣民ノ願望ヲ容納スルヲ肯ムセサリシ諸君主ハ争フテ譲歩ヲナシサルデーニユ王シヤルヽザルベールハ三月四日恰モ(二)八三〇年ノ憲法ニ拘シキ一ノ憲法ヲ制定シテ之ヲ發布シ其ノ後千数日ヲ経テ法王ピー九世モ亦之ニ倣フテ一ノ憲法ヲ發布シタリ是ノ時ニ方リテ自由、独立、統一ノ声ハ殆ムド伊太利全土ヲ震動シ愛國者ハ所在ニ蜂起シナルデーニユ王ヲ推シテ其ノ墺國ニ對スル國民的十字軍ノ首領タラシメムト欲シ而シテ王モ亦

進ミテ其ノ任ニ膺ラムト欲シテ其ノ兵ヲテツサン河邊ニ集中シタリ然レドモ墺國政府ハ更ニ大兵ヲ集メテ盛ムニ防禦ノ備ヲ為シヽカバシヤルヽザルベールハ軽挙事ヲ失ハムコトヲ恐レ敢テ其ノ真偽ノ企図ヲ表示スルコトナクシテ姑ク事勢ノ変ヲ待テリ此間民主主義ハ潮ノ湧クガ如ク昌曼ノ諸小邦ニ侵入シ二月下旬ヨリ三月上旬ニ亘リテ日耳曼聯邦ノ諸君主ハ既ニ皆出奴及ビ集會ノ自由ヲ其ノ臣民ニ與フルノ已ムヲ得ザルニ至リ新タニ憲法ヲ制定シテ之ヲ發布シ若クハ一タビ廃止シタル憲法ヲ復立スル者亦陸續踵ヲ接シフランクフオールトノ聯邦議會ハ其ノ一八三二年及ビ一八三四年ニ發布シタル專制的法令ヲ廃止シ之ニ加フルニ

多年日耳曼ノ統一ヲ計ルニ熱中シテ國民ノ間ニ大ニ声望ヲ博シタル若干ノ愛國者ハ三月香期セズシテ ヘイデルベルグニ會合シ 仝月三十一日ヲ期シテ一ノ準備議會(パールマンプレパラトリー)ヲ開キテ日耳曼ノ為メニ一ノ憲法議會ヲ開設スルノ決議ヲ出サシメムコトヲ議決シタルニ日耳曼聯邦ノ人民ハ非常ノ歡声ヲ揚ケテ此ノ議決ニ賛同セリ且ニ於テメテルニウヒハ其ノ多年ノ經營ニ成レル功業ノ一朝ニシテ壞敗ニ帰セムコトヲ憂惧シ百方手段ヲ尽クシテ日耳曼國民ヲ購着セムト欲シ普國ニ向ヒ三月二十五日ヲ以テ一ノ外交的協議會ヲドレスト ニ開クノ提議ヲ為シ仍テ此協議會ニ於テ新タニフランクフオールノ聯邦議會ニ加入セル民選ノ分子ヲシテ危害ヲ王室ニ

及ボサシメサルノ方法ヲ決定セムコトヲ計レリ而シテメテルニウヒハ極メテ急速ニ此ノ談判ヲ遂ケムコトヲ欲シタルモ革命ノ運歩ハ更ニ之レヨリモ一層急速ニシテ遂ニ之ニ追及スルコト能ハズ日耳曼及ヒ伊太利ニ於テハ懐國政府ヲ除クノ外絶エテ其革命ノ運動ヲ制止セント欲スルモノアラザリキ

(三)

三月十三日維納全市ノ民亦其自由ヲ得ムト欲シテ一時ニ蜂起シ而シテ其ノ戰鬪ハ時間ヲ出デズシテ人民ノ勝利ニ帰シ闇愚ニシテ懦弱ナル墺帝フエルヂナンハ從来絶エテ其ノ政令ヲ親ラセシコトアラザリシカ乱民ノ迫ル所トナリテ恐

懼措クコト能ハズ初メテ自ラ今ヲ下ダシテ四十年
来其ノ國政ヲ專ラニセル老相メテルニッヒノ官ヲ
罷メリメテルニッヒハ難ヲ避ケテ和蘭ニ奔リ迂ヒ
テ更ニ英國ニ遁レフイワケルモン伯之ニ代リテ首相
ニ任セラレ皇帝ノ名ヲ以テ新タニ一ノ憲法ヲ發布
シタルニ帝國内ノ日耳曼人種ハ槩ネ之ニ滿足ヲ
表シタルモ多年其ノ獨立ノ權利ヲ要求セル洪
加利人ニ至リテハ敢テ之ニ滿足スルノ色ナキヲ以テ
三月十七日之レガ為メ新タニ独立ノ内閣ヲ設ケ
テバチ■ヤニー伯ヲ其ノ首相ニ任ジペストノ議
會ニ典フルニ強ムト無限ノ立法權ヲ與ヘテシタリ
此他尚ホ「スラーヴ」人種ハ墺國ニ於テ別ニ一個
ノ自治体ヲ組織センコトヲ要求シ帝ノ懦
弱ナル強ヒテ之ヲ拒ムコト能ハズ亦其ノ要求ヲ
入ベキ約シタリ
維納ノ騒乱ハ先ツ其ノ影響ヲ些勢伊太利ニ及ボシ
從来壓制セラレタル同地方ノ革命党
ハ此ノ騒乱ノ報ニ接シテ忽チ所在ニ蜂起シ三月十
九日ヨリ二十二日ニ彌リヴニーズノ革命党ハマニン
ヲ首領ニ戴キ墺國ノ兵ヲ同市ヨリ駆逐シテ仮ら
ニ共和政ヲ建設シ以テ伊太利全土ノ統一ニ至ル
ヲ待テリ次ヒテミラン市モ亦蜂朔シテ其ノ騒乱
ハロンバルヂー全州ニ及ビ交戰四日ノ後チ墺兵ノ
司令官老將ラデツキーハ遂ニ敵スルコト能ハズ
シテ退キテペッシエラー、マンツー、ルニヤゴー及ビウル
エロースノ四城ヲ堅守シ此ノ四城ヲ除クノ外ハロン

バルヂー及ビウエニシーノ兩州中ニ於テ一城一市モ僕國ノ有ニ屬スル者ナキニ至レリ而シテ之ト同時ニモデーヌ公及ビパルム公ハ其ノ國ヲ亟ハレ諸方ニ於テ蜂起シタル人民ハ皆均シクサルデーニユ王シヤルヽザルベールヲ推シテ其ノ首領ト為ナシタルコトヲ望メリサルデーニユ亟ハ三月ニ十三月マテ尚ホ兩端ヲ觀望シヽガ二十四日ニ至リ始メテ決スル所アリ檄ヲ飛バシテ伊太利國民ノ独立ヲ喝破シ自ラ將トシテ其國ヲ発シ二日ヲ經テミラン市ニ入レリ當時王若シ層果断ニシテ其兵ヲ起スコト二月ヲ早クシタラムニハ必スヤラデツキーヲシテ其兵ヲ集合シテ退却ヲ為スノ暇ナカラシメシナルベシ將タ若シ此ニ水ク滞留スルコトナクシテ急ニ兵ヲ進メテ僕兵ヲ追

擊シタラムニハ必ズヤ大ニ之ヲ破ブルコトヲ得タリシナルベシ然レトモ王ハ當時佛國ニ對シテ痛ク猜疑ノ念ヲ抱ケルヲ以テ專ラ其ノ意ヲアルプノ方面ニ注キ墺國ノ兵ノ去ルニ任セテ肯テ佛國ノ政府ヨリ其ノ援ヲ假ルノ意ナキコトヲ宣明シ意太利ハ能ク自國独力ヲ以テ自國ノ事ヲ營ムベシト揚言セリ然ル所以ノ者ハ他ナシ王ハ蓋シ共和政ノ佛國カ伊太利ニ於テ民主旨義ヲ呼唱シ國リテ以テ自己ノ王位ヲ覆ヘサムコトヲ恐レタルニ當時適ヽサヴオアニ於テ事業党ノ騒乱ヲ起セルアリ其ノ準備ハ佛國里昂ニ於テ成レル者ニシテ王ヲシテ益ヽ其ノ佛ヲ疑フノ念ヲ深カラシメタルカ故ナリ既ニ

シテ其ノ騒乱ハ日ナラズシテ鎮定シ、ヲ以テ王ハ兵ヲ進メテマンシオーニ達シコアトーニ於テ大ニ墺國ノ兵ヲ破ブリシモ當時復タミラノニ於テ共和党ノ蜂起セムトスル雲アリシヲ以テ王ハ之ニ備フルガ為メ兵ヲ按シテ進ムコトナク数週日ノ間空シクマンシオーニ滞留セリ次ヒデ四月二九日ニ至リ王ハ更ニ墺兵ヲパストレンゴーニ破ブリテラデッキーヲヴエローヌニ走ラセ進ミテペスシエラーノ城ヲ圍メリ勢ヒ此ノ如クナルヲ以テ北部伊太利ニ於テハ人皆先ヲ爭フテ来リテ王ノ軍ニ合シ墺帝ノ近親タルトスカーヌ大公スラモ獨ホ且ツ王ニ数千ノ援兵ヲ送クルノ已ムヲ得ザルニ至リ法王ノ兵ヲ指揮セル將軍デコラドーハポー河ヲ渉リテヴエネシーニ到リ以テラデツキーノ兵ノ墺國ニ帰ルノ道ヲ遮断セムト欲シ而シテナーポル王モ亦ヴニーズノ市民ヲ援クルカ為メ其ノ艦隊ヲ派遣シ又老將ペープガ二萬五千ノ兵ヲ引ヒテウイオンスノ方面ニ進向スルヲ許シタレバ墺國ノ兵ハ四面敵ヲ受ケテ手ヲ拱シテ敗滅ヲ待ツノ外ナキニ至レリ

革命ハアルプ山北ニ於テモ亦アルプ山南ニ於ケルト均シク大捷ヲ獲タリ普都伯林ニ於テハ三月十六日ヨリ同シク十九日ニ彌リテ騒乱起リ二十日ニ至リ普王フレデリツクギーオーム四世ハ百事皆人民ノ要求ヲ容レテ新タニ自由党ノ内閣ヲ組織シ從来封建党若クハ守旧党ノ首領ヲ以テ目

セラレタル王第ギーオーム親王ヲ點ケ四月二日國
中ノ地方會議ヲ招集シ不日ニ開設スヘキ立憲
議會ノ選擧法ヲ議決セシメタリ蓋シ普王ハ
夙トニ日耳曼聯邦ヲ統一スルノ大志ヲ抱キカノ
テ自由主義ニ稱ヘル言動ヲ事トシ日耳曼祖
國ニ對シテ常ニ報效ノ誠ヲ表シ以テ其ノ防禦者
タリ復雖言者タルコトヲ中外ニ示サムト雖モ欲シタルナリ
雖納及ビ伯林ノ形勢既ニ以上ニ述ブル如クナリト
セバ其他日耳曼聯邦中ニ於テ孰レノ改府ト
雖トモ準備議會ノ開會ヲ制止スル能ハサル
ヤ言ヲ俟タズ故ニ該議會ハ三月三十一日ヨリ四月
四日ニ至ルマデフランクフオールニ開會シ立憲議會
ハ日耳曼國民全体ノ普通選擧ヲ以テ之ヲ

聞キ日耳曼聯邦ヲ通シテ一ノ君主政体ヲ設ケ
而シテ其ノ立憲議會ハ聯邦ノ主權ヲ握有シ其
ノ制定セル憲法ハ聯合各邦ノ兼諾ヲ待タズシ
テ之ヲ實行スヘキ旨ヲ議決シタリ見ルヘシ此議
決タル神聖盟ノ旨義ニ至痛ノ大打擊ヲ與ヘ
タル者ナルコトヲ

(四)

日耳曼ノ愛國者中ハ間ニ共和政ノ設立ヲ冀
望スル者アリ彼等ハ四月中ハ萊茵地方ニ於テ密
カニ叛乱ヲ起サムコトヲ企テタリシモ其ノ党
與ハ僅々ノ少數ニシテ加フルニ國人皆彼等ヲ厭
欺ヲ佛國ノ民主党ニ通スル者トシ痛ク之ヲ擯
斥シ以テ其ノ勢力微々トシテ振フコト能ハ

サリキ蓋シ『自國ノ事ハ自國ノ独力ヲ以テ之ヲ
營ムヘシ』テフ警語ハ萊國以東ニ於テモ亦猶ホ
アルプ以東ニ於ケルカコトク當時ノ革命党ノ主
唱セル所ニシテ日耳曼人ハ帝ダニ佛國ノ援ヲ仮
ルコトヲ欲セザルノミナラズ常ニ仏國ヲ以テ仇敵
ノ觀ヲ為シ又アルサス及ビロールレースヲ領有スル
許サズシテ必ズ之ヲ其ノ祖國ニ克復セサルベカ
ラストナセリ且ツ又ノ所謂ル祖國ナル者ハ彼等
ハ汎ク旧紀ヲ搜リテ大ニ其ノ疆域ヲ擴張シ普魯
波蘭土ノ如キモ亦又ノ中ニ包有スベキ者ナリト
ナシ又往昔封建時代ニ於テコルステイン州トタル
ノ関係ヲ有シ而シテ當時ハ全ク丁抹王國ノ版図
ニ屬シ又ノ人口ノ大部モ亦「スカンヂナーヴ」人ヨリ成

レルスレスウイッグ州ノ如キモ亦日耳曼ノ一部ナリ
トシテ之ヲ獲ムコトヲ要求シ而シテ彼等カ諸種
ノ要求ハ就中最後ノ要求ニ至リテ大ニ普國ノ
嘉納スル所トナレリ他ナシ普國ハ之ヲ以テ帝ダ
ニ又ノ人望ヲ収ムルノ手段トナセルノミナラス亦大
ニ又ノ勢力ヲ張ルノ手段トナシタルガ故ナリ
果シテ先キ丁抹王クリスチヤン八世ハ一八四八年一月
二十日ヲ以テ世ヲ逝リシ又ノ嗣子フレデリック七世
即位ノ後チ新メニ其版図内ノ諸州ニ共通スベ
キ憲法ヲ制定スヘキヲ布告シタルニホルステイン
ノ州民ハ日耳曼人ノ援ヲ得テ大ニ之ニ異論ヲ唱
其ノ州ノ為メニ特別ノ制度ヲ設ケテフレスウイッグ
州ニ於テモ亦之ヲ適用セシコトヲ要求シ而シテ又ノ

間ニ起レル如ク婚姻ノ問題ハ更ニホルステイン州民ニ
対シ要求ノ辞柄ヲ與ヘタリ蓋シフレデリック七世
ハ二ビ結婚シテ二ビ離婚シ一人ノ兒子ヲ有セズ又
公ノ一門ハ其ノ最近ノ親族ナリト雖トモ是レ
女系ノ親族ニシテ男系ノ親族ニアラズ然ルニ丁
抹ニ於テハ一六六五年ノ法律ニ由リ女系ノ継統
ヲ許セリト雖トモホルステイン州ハ往昔封建時
代ニ於テ日耳曼ノ領土タリシノ故ニ由リ今尚古
ノ慣習ニ從フテ男系継統ノ法ヲ取レリ故ニ丁抹
王家ノ男系ノ遠親タルオーギステンブールグ公ハ将
来ホルステイン州ヲ相續スルノ権利アル者ハ自
己ニ外ナラズトナシ而シテスレスウイッグ州モ亦
併セテ之ヲ獲ムコトヲ要求セリ既ニシテ公ハ雖ト

及ビ伯林ニ於ケル革命ノ変報ニ接シホルステイン
州民ヲ煽動シテ乱ヲ起サシメ三月二十四日ニ州ニ於
テ新タニ総督府ヲ設ケテ自ラ其ノ長官トナリ普
國ニ向フテ其ノ援ヲ請ヒシニ普國政府
ハ北海バルチック海トノ間ニ新タニ一國ヲ建設シ
テ其ノ海港ヲ開キ以テヨルヴヱレン仝盟ノ勢力
ヲ擴張スルノ大ニ其ノ國ニ利アルヲ察シ輙チ其ノ
請ヲ容納シテ當時自國ト丁抹トノ間ニ一ノ争端
ダモ存セサルニ拘ラズ又敢テ宣戦ノ形式ヲ履
行スルコトダモ為サズ四月六日卒然兵ヲ發シテ
ホルステイン州ニ入ラシメ一ケ月ノ後チスレスウイッグ
州ノ全部ヲ占領シ更ニ進ミテジユトラン州ニ侵入
シ初シテハノーヴル、メクレンブールグ等ノ如キ北部日耳

曼ノ諸小邦ハ普軍ノ成功ノ極メテ容易ナルヲ
視テ相倶ニ其ノ利ヲ分タムト欲シ競フテ其兵ヲ
發シテ普軍ニ加ハリ丁抹王國ノ叛國ハバルチック
於ケル二三ノ島嶼ヲ除キテ餘ハ悉ク日耳曼ノ有
トナラムトスルノ勢ヲ呈シタリ

（五）

此ノ間墺國ニ於テハ更ニ一ノ騒亂ヲ惹起セリ紛
肯相フイツケルモンハメテルニッヒノ門下ニ生ミシテ
亦妨ミテ權變ヲ弄シ革命党ヲ憎着セム
ト欲シテ適々ナマ其ノ激昂ヲ買ヘリ彼レハ自
由討議ニ中リテ憲法ヲ制定スルコトナク四月二
十五月帝ヲシテ欽定憲法ヲ發布セシメ五月六日
更ニ選擧法ヲ發布シタルニ民主党ハ大ニ其法

ノ不完全ナルヲ難シ同月十五日維納市民ハ
再ヒ起リテ乱ヲ為シフユルヂナン一去ハ再ヒ叛
徒ノ迫ル所トナリテ其ノ要求ヲ朝シテ立憲議
會ヲ招集セリ然レトモ帝ノ懦弱ナル維納ニ在
リテハ危懼ノ念ニ勝フル能ハズシテ其ノ翌日
宮廷ト倶ニ チロール州ノインスブリュック市ニ逃走
シタリ（日耳曼地ヲ擯ヒタル因ヨリ偶然ニ之ニ出ヒタルニ非スシテ當時ノ事情ハ實ニ帝カ
抑モ墺帝カ其ハ難ヲ避クルニ方リテ日耳曼ノ
地ニ留マルノ必要アリシナリ当時洪加利人ハ
切ニ帝ニ請フテ其ノ國都ベストニ迎ヘムト欲シ
タルモ帝ハ洪加利人カ其零落ニ乗シテ大ニ
要求スル所アラムコトヲ恐レ亦其ノ危難ノ極
ニ至リテ其ノ援ヲ得ムコトヲ期シタル需帝ノ

怒ニ觸レムコトヲ恐レテ其ノ請ニ應スルコトヲ敢テセザリキ蓋露帝ハ洪加利人ガ輙モスレバ列ニエーブ方面ニ於テ露ヒトヂ勢カヲ爭ハムトスルノ故ニ尊又彼等ノ敵視スル南方ノ「スラーヴ」人種ニ對シテ大ニ同情ヲ有スルノ故ニ尊而シテ波蘭土ノ亡命者ガ洪加利ニ於テ大ニ優遇セラルヽノ故ニ尊夙トニ洪加利人ニ對シテ憎焉タルコト能ハザリシナリ

フヲルデナンド一世ハ又クロチー列若クハエスクラヴオニー列ニ奔ルコトヲ得タリシナルベシ然レトモ当時ニ列ノ民ハ其ノ知事ゼラヒウヒニ煽動セラレテ乱ヲ起シ以テ其ノ獨立ヲ得ムコトヲ計レルヲ以テ之ニ赴クハ頗ル危險ノ事ナシトセズコノ他獨ホヲエーム列アリ亦切ニ帝ヲ其ノ列ニ迎ヘムコトヲ請ヘリ然レトモ同列ノ「チエック」人種ハ平素日耳曼人種ト相善カラズシテ亦別ニ独立ノ一國ヲ為サムト欲シ五月三十一日ヲ期シテ「プラーグ」ニ一ノ議會ヲ招集シ凡ソ墺帝國内ノ「スラーヴ」人種ハ皆ナ之ニ代表者ヲ出スベキ者トシテ而シテ「フランクフオール」ノ聯邦議會ニ其ノ議員ヲ出ダスコトヲ拒メリ故ニ帝若シ「ボヘーム」列ニ到リテ「チエック」人ノ保護ニ其ノ身ヲ托スルトキハ日耳曼人種ノ怨ヲ買フコト疑ヲ容レズ且ツ「フランクフオール」ノ日耳曼議會ハ五月十八日其ノ會ヲ開キテ其議長ニハ國民党ノ首領ニシテ日耳曼ノ統治權ヲ普魯ニ托セムコトヲ希望セル アンリード、ガゼルンヲ擧ケ而シテ議會ハ第一着ニ日耳曼帝

國ノ為メニ一ノ假政府ヲ設ニスヘキヲ議決シタレバ
懷帝若シ「スラーヴ」人ヲ捨テ、日耳曼人ニ好意ヲ
表スルコトナクムバ必ヤ假政府ニ於テ其ノ勢力ヲ
失ハザルベカラズ而シテ日耳曼議會ノ援ヲ
得テ議會ノ革命ヲ討滅セムト欲スルモ得ベ
カラザルベシ
是故ニ帝ガ其ノ難ヲ避クルニ日耳曼ノ地ヲ擇
ミタルハ是レ其ノ措置ノ最モ當ヲ得タル者ト謂
ハザルベカラズ且ツ帝ハ力メテ日耳曼人ノ惟心ヲ
買ハムト欲シクロアチー刻ノ知事セラヒッヒノ措置
ヲ非認シテ其ノ官ヲ免ジ又ブラーグ市ニ於テ騷
擾ノ起レニ乘シ兵ヲ發シテ同市ヲ砲擊シ仍テ
之ヲ占領シテ待ツニ攻取シタル敵城ヲ待ツノ

欲

道ヲ以テシ且ツ兵威ヲ示シテ強ヒテ「スラーヴ」議
會ヲ解散セシメタリ
フエルヂナン一世ガ右ノ如クシテ日耳曼人ノ惟心ヲ
收メムト欲シタルノ措置ハ果シテ能ク其ノ効
ヲ奏シ当時日耳曼議會ニ於テ尚ホ大ニ勢力
ヲ占有セル「ハブスブルグ」家ノ党派ハ益ニ議會ノ
シテ日耳曼帝國ノ總督ヲ懷柔シ皇族中ヲ
挙クルノ議決ヲ為サシメフエルヂナン一世ノ伯父ニシテ
日耳曼全國ニ於テ最モ名望ヲ有セルシヤン大公
ハ六月二十八日總督ニ任セラレテ七月十二日始メテ其
職ニ就キ而シテ實際ニ於テハ疾クヨリ其ノ跡ヲ
絶メタル從來ノ聯邦議會ハ此日ヲ以テ公然解
散ヲ命シ又新タニ其ノ組織シテ其ノ首座

ヲ懷ク人スピメルリング男ニ與ヘシト同時ニ議會ハ
伊太利ニ於ケル墺國ノ主張ハ亦日耳曼全体ノ
主張ニシテ「ハプスブルグ」家ノ權力ヲ維持スルハ日耳
曼ノ為メニ主要ノ利益ナルコトヲ宣言シタリ

（六）

且ツ是ノ時ニ方リ伊太利ニ於ケル墺國ノ兵ハ再ビ大
ニ其ノ勢力ヲ挽回スルヲ得タリ是ヨリ先キ四月下
旬ヨリ六月上旬ニ彌リ墺將バデツキーハピエモンノ兵
ヲ擊退セムコトヲ試ミタルモ屢ヽ自ラ敗績ヲ招
キテペツシーラノ堅城ヲ失ヒ孤軍ヲ以テ大敵ヲ
支ヘ日夜唯ダ預ヲ長クシテ將軍ニユジャンガ兵ヲ
引ヒテ墺地ヨリヴエネシーヲ過ギ來リテ已レヲ
援クルヲ待テリ然レトモナープルノ軍若シニ

ジャンノ到ルニ先チテポー河ヲ過グルトキ其ノ援
兵ハ中途ニ抑留セラルヽノ恐レナシトセズ故ニ当時
墺國政府ハ數十週日ノ間痛ク伊太利ノ形勢ヲ憂
慮シ仍テ其ノ利益ノ一部ヲ割キテ其ノ餘ヲ保
全スルノ策ニ出デ先ツパルム及ビモデースノ二州ヲ
ロンバルチーヴエネシヤン王國ニ合シテ「エスト」家ノ一公
族ヲ其ノ主權ノ副王ト為スノ議ヲ提出シ次ヒ
テ更ニ一ノ條件ナクシテロンバルチーヲ放棄シ而シテ
ヴエネシーヲハ自治州ト為スノ議ヲ提出シ英
國政府ニ向ヒ其ノ提議ニ協賛シテ調停ノ任
ニ当ラムコトヲ乞ヘリ然レドモ英國政府ハピエモン
王ガ其ノ版圖ヲ擴張シテ一面ニハ墺地ヲ控制
シ他ノ一面ニハ仏國ヲ控制スルニ足ルベキ一個ノ強

カナル二等國ヲ新タニ北部伊太利ニ建設セ
ムトスルヲ喜ビ墺國ノ提議ニ應スルコトヲ肯
ムセズ而シテ仏國ハ当時新タニ立憲法議會ヲ
開キテ假政府員ノ一部ニ行政權ヲ委任シタ
リシガピヱモンテシヤル、ザルベールガ自國ニ對シ
テ猜忌ノ念ヲ抱ケルニ係ラズ議會ハ明カニ
諸國ノ人民ガ貢献独立ヲ計ルノ運動ニ對シ
就中伊太利國民ノ運動ニ對シテ深切ナル
同情ヲ表スル旨ノ議決ヲ為セリ（五月二十四日）
且ツ仏國ハ伊太利ニ於テ王政ノ勃興セムヨリ
モ寧ロ共和政ノ創立セラレムコトヲ希望
セザリシニアラズト雖トモ而モ其ノ政体ノ
立君制タルト共和制タルトニ論ナク伊太利

ノ革命ハ宜シク之ヲ扶ケテ其ノ勝ヲ獲セシ
メザルベカラスト思料シ一軍ノ兵ヲ発シテアルプ
山禁ニ集中シ而シテ仏國外務大臣バスチード
英將パルメルストン卿カヲ併セテ墺國ニ迫リ以テ
其ノロンバルヂー及ビヴエネシーノ領有權ヲ放
棄セシメムコトヲ計レリ是ニ於テシヤル、ザルベール
ハ英仏二國ノ援ヲ獲テ大ニ其ノ意ヲ強クシテ
ヱルヂナン一世ノ提議ヲ峻拒シテ墺地ノ兵ノ全ク
半島内ヨリ退去セシコトヲ要求シタリ且ツ當時
伊太利ノ形勢ハシヤル、ザルベールガ此点ニ就キテ一歩
ダモ讓ルヲ許サスシテミラン及ヒロンバルヂーノ
二州ハ六月四日降ヲシヤル、ザルベールニ答レパルハ、モ
デーヌ、ヴニーズノ諸市モ亦皆日ナラズシテピヱモン

ニ合併スヘキヲ講決シタリ然レドモ幸運ハ久シ
クシヤルヽザルベールノ身ヲ擁護スルコトナク彼レハ
敢ニ乗シテ其ノ兵ヲ進メズシテ在萬時日ヲ徒消
シ而シテ其間不測ノ事変ノ発生スルアリテ懷玉
ノ兵ヲシテ更ニ其ノ歌ヲ轉シテ勝トナスコトヲ得
セシメタリ
是レヨリ先キ法王ピー九世四月下旬其ノ將ヂニラ
ンドーノ提議ヲ拒ミシ次ヒテマミヤニー内閣ハ
之ニ迫リテ墨國トノ戰ヲ開カシメムト欲シタルモ亦
復タ固ク執リテ其ノ説ニ從フコトヲ肯セズ而シテ
ナーポル王ハ五月十五日其ノ首府ニ於テ騒乱ノ
起レルヲ名トシテ再ヒ專制ノ政ニ復シ丈ノ議会
人解散ヲ命シ其ノ艦隊ヲヴニーズヨリ召還

シ既ニゴローニエニ達シタル將軍ペープニ其兵ヲ引ヒ
テ南部伊太利ニ退去スベキヲ命シタルニペープハ
丈令ニ從フコトヲ拒ミタルモ部下ノ兵士ハ過半之
ヲ捨テ、逃亡シ六月中旬之ト倶ニヴニーズニ達シ
タルニ丈人數ハ纔カニ二千乃至三千ニ過ギザリ
キ而シテ以上ノ事ハ大ニシヤルヽザルベールノ軍ニ不利
ヲ與ヘヂニランドーハウイナンスニ於テラデツキー及ビニエ
ジヤンノ兵ニ合撃セラレ遂ニ以而軍ノ連絡ヲ
遮斷スルノ目的ヲ達スルコト能ハズ果ニ至リテ
サルテーヌ王ハ復タ墨兵ノ敵ニアラザルコト智者
ヲ待テ之ヲ知ラズ然ルニ王ハ今ニ至ルマデ連リテ勝
利ヲ獲タルニ押レ又シヤル人ガ其ノ次子ヲ清フテ
之ヲ其ノ王ニ戴カムトスルニ曹フテ大ニ倨傲ノ態

ヲ長シ且ツ仏國ノ兵ノ来援ヲ恃ミテ明ニシテ敢テ
懷軍ニ備フルノ計ヲ講スルコトアラサリキ然レドモ
當時仏都巴黎ニ於テハ騒乱再ヒ起リテ殆ンド無
政府ノ状況ヲ呈シタレハ寡クトモ数週日ノ間ニハ仏
國ハ固ヨリ又援兵ヲ伊太利ニ送ルコト能ハズ[illegible]
ハ能ハス然ルニ知レリ故ニ急ニ又ノ兵ヲ進メテ[illegible]
シーノ大部ヲ征服シタル後チ七月中旬大挙シ
テピエモンノ兵ヲ襲ヒ同月二十五日大ニ之ヲ[illegible]
ニ破リシヤル、ガルベールハ一旦又兵ヲ[illegible]市ニ退ケハ
月六日更ニ同市ヲ捨テ、走リ三日ノ後チ英仏二國ノ
調停ニ由リ幸ニシテ休戦ノ約ヲ結ビ又ノ殘兵ヲ
引ヒテ[illegible]ノ西岸ニ退キ而シテ墺國ハ前キニ
千八百四十八年ノ始メニ際シテ伊太利ニ於テ領

有シタル版圖ノ中ヴニーズヲ除クノ外悉ク之ヲ恢復
スルヲ得タリ

（七）

墺國改府ハ此ノ意外ノ捷利ノ為メニ頓ニ又ノ勇
氣ヲ回復シ轉シテ洪加利ニ向ヒテ又ノ過大ノ要
求ヲ抑ヘムコトヲ計レリ是ヨリ先キ洪加利ハトラン
シルヴニー州ヲ其ノ國ニ合併シ、ガ同州民ノ多数ハ
「ルマニー」人ニシテ洪加利人ノ羈絆ヲ被ムルヲ欲セ
ス洪加利改府ハ又南部「スラーヴ」人ヲ又ノ臣民
ト視做シテ自治ノ權ナキ者トシ且ツ墺帝ニ迫リテ
クロアムシー州ノ知事ゼラシーリヲ免黜セシメ而シテ
七月五日ヲ以テ開會セル洪加利ノ立憲議會ハ益ク
其國人ノ過大ナル要求ヲ鼓舞シ從来存立セル凡

有ノ制度ハ擘ケテ之ヲ破壊シタリ然ルニ墺国政府ハ其ノ伊太利ニ事アルノ間ハ務メテ之ヲ懷柔シテ其激昂ヲ招致スル勿カラムコトヲ欲シタルモ而モ間接ニハ洪加利人ノ独立ヲ抑壓スルノ措置ヲ施コス

ヲ怠ラズ六月下旬モルダヴイー及ヒヴラシーノ二州ニ於テ革命的騒乱ノ起レルニ際シ墺国ガ容易ク露国ノ軍兵ノ右ノ二州ヲ占領スルヲ許諾シ仍テ當時波蘭土ニ於テ二十萬ノ大兵ヲ擁シタル露帝ヲシテ墺国ノ衰運ニ乗シテ大ニ其勢力ヲ東方地方ニ伸ハスコトヲ得セシメタルハ他ナシ蓋シ亦露国ノ大兵ヲ洪加利ノ国境ニ集中セシメテ以テ其ノ羊余ノ氣勢ヲ壓セシト欲シタルニ外ナラズ

既ニシテ墺軍キユストザーノ戰ニ克チテ八月九日ミヤルゼルベールト休戰ヲ約シタル後チ墺国政府ハ英仏二国ノ斡旋ニ由リテ開始シタル伊太利事件ノ決ヲ結ラスルニハ必ス数多ノ時日ヲ要スベキヲ憂リ其ノ間ヲレテ急ニ洪加利人ヲ強制シ之ヲシテ昔日ノ如ク墺国ニ恭順ナラシメムト欲シ墺帝ハ從来陽ハニ南部スラーヴ人ヲ蹂躙スルノ状ヲ装フテ暗ニ其ノ洪加利人ニ對スル叛乱ヲ煽動シタリシモ美ニ至リテ始メテ其ノ假面ヲ脱シテ公然スラーヴ人ヲ援ケ九月三日ニハセラシフリヲ擢ケテ再ビクロアシー州ノ知事ニ任シタリ

（八）

墺国政府カ當時日耳曼人ノ仇敵視セル露国及

ビ南部「スラーヴ」人ト結ヒテ同盟ヲ為セル一事ハ唯ダ
ニ洪加利人ノ激昂ヲ招キタルノミナラズ更ニ大ニ日
耳曼人ノ感情ヲ傷ヘリ且ツ當時フランクフオール
ノ日耳曼議會ハ別ニ墺國ニ對シテ移ヲ抱ケ
ル一事アリ又ノ事タルヤ他ナシ墺國ガ自餘
ノ諸國ト謀ヲ通シテ日耳曼國民ノ丁抹ニ對
スル野心ヲ抑ヘムト欲シタリト言フコト是レナリ
是レヨリ先キ丁抹政府ハ故ナクシテ普國ノ為
メニ侵寇セラレ又ノ兵ハ皆能ク勇ヲ奮フテ抗
戰セリト雖モ而モ寡ヲ衆ニ敵シ遂ニ抗スルコト
能ハズ丁抹國カ歐洲ノ北部ニ於テ海上權ノ均
勢ヲ維持スルヲ利トスル諸國ニ向ヒ之ヲ援ケ
テ其ノ疆土ノ安全ヲ得セシメムコトヲ懇請

フランクフオールノ議會ソレノ其條約ヲ破棄セレメタリ既ニシテ其翌八月ニ至リ佛國政府ハ

シニ瑞典及ヒ英國ハ直チニ其ノ請ニ應シ五
月普國ニ迫リテ「ジユトランノ占領ヲ撤セシメ次
ヒテ露國モ亦英瑞二國ノ合シテ七月二日普丁ノ間
ニ休戰條約ヲ結バシメシモ普國政府ハカベニヤツリ
ヲ首相ニ戴キテ漸クニ其ノ内國ノ秩序ヲ復立シ更
運動ノ自由ヲ有スルコトヲ得タレバ亦英、露、瑞、
ノ三國ニ合シテ渉ヲ施コシ而シテ墺國モ亦密カニ
之ヲ援ケ八月二十六日更ニマルモーニ於テ普丁ノ間
ニ七ケ月間ノ休戰條約ヲ結ハシメタリ此ノ條約
タル丁抹ノ為メニハ極メテ利益アル者ニシテ普國
ハ諸大國ノ迫ル所トナリ力足ラスシテ已ムヲ得ス之
ニ屈從シニ過キズ故ニフランクフオールノ日耳曼議
會ハ九月五日一旦該條約ヲ非決セリト雖ドモ後チ

更ニ之ヲ拒所スルコト能ハザルヲ察シ九月十八日遂ニ
之ニ批准ヲ與ヘタリ然ルニフランクフオールノ市民ハ大ニ
議會ノ措置ヲ憤ク十八日ニ至リテ一大騒乱ヲ惹
起シ議會ハ周章ノ極普國ノ兵ノ来援ヲ求メ
幸ヒ此ヲ市内ノ平和ヲ回復スルヲ得タリ是ヲ以
テ不平ノ徒ハ去リテ策国地方ニ赴キテ再ビ日耳
曼ニ於テ共和政ヲ建設スル運動ヲ為シ之ニ議
會ハ其ノ為ス所ヲ非認シ國中ノ立憲党ハ普王
フレデリック、ギーオーム四世ヲ推シテ西部日耳曼
ノ急激党ヲ掃平スルノ任ニ當ラシメムト欲シ
而シテ王モ亦喜ビテ其任ニ當ル日ナラズシテ掃
平ノ功ヲ奏スルヲ得タリ是故ニ二日耳曼人ハ
普王ガ丁抹ノ事ニ就キテ歐洲列國ノ為メニ強

制セラレタルヲ視テ痛ク之ヲ憾メリト雖モ敢テ
王ニ對シテ不満ヲ訴フルコトナク王ノ軍兵ガ策
國ノ方面ニ在リテ其ノ累卵ノ危敵タル仏國ト相
對スルヲ視テ益ヽ臨ニ王ニ屬シ策論ハ必然王
ニ擬スルニ日耳曼帝國將来ノ首長ヲ以テスルニ
至レリ

（九）

之ニ反シテ墨國政府ハ一方ニハ痛ク日耳曼人ノ
非難ヲ受クルト同時ニ他方ニハ益ヽ洪加利人
ノ不平ヲ招キ其ノ威望日ヲ追フテ衰退スルノ徴
アリ既ニシテ維納ノ議會ハ政府ガ其選擧ニ
干渉シ、ニ中ラ「スラーヴ」人種ノ多數ニ帰シタルヲ
以テフランクフオールノ日耳曼議會ト「ペスト」ノ洪加

利政府トハ益ニ墨国ニ蓄シテ不平ノ念ヲ長シ次
ヒテ洪加利人ハゼラシツリガ毎ヒクロアシー州ノ知
事ニ任セラレトウヴ河ヲ渡リテ將ニ其ノ任地ニ
赴ラムトスルヲ視テ帝ニ乞フニ其ノ来任ヲ留メム
コトヲ以テシタルモ聽レザリシガ為メ自ラ起テ其
希望ヲ達セムト欲シ墨国ニ叛キテ乱ヲ起シ墨
帝ノ命ニ由リ特派視察員トシテペストニ赴キタル
ランペルリ伯ハ九月廿七日同市内ニ於テ暴民ノ
殺害スル所トナレリ同ク二十九日帝ハ洪加
利議會ノ解散ヲ令シ更ニ四日ヲ経テゼラシツ
リヲ洪加利ノ總督ニ任シタルニ此等ノ措置
益ニ洪加利人ノ激昂ヲ招致シ十月六日維納
府民ハ三タビ起リテ乱ヲナシ懦弱ナル墨帝ハ

再ビ其ノ首府ヲ去リテクランシエル市ニ逃レ墨国
議會ニ倶ニ同市ニ来ルベキヲ命シタルモ能ク
其命ニ從フテ同市ニ赴キタルハ單ニ「スラーヴ」
人種ノ議員ノミニシテ而モ其中ノ波蘭土人ハ
猶ホ日耳曼人ト倶ニ維納ニ止マリテ革命議
會ノ如キ者ヲ組織セリ而シテフランクフォルトノ日
耳曼議會ハ維納ノ叛乱ニ驚ク敢テ公然是認
スルコト能ハザルモ而モ内心頗ル之ヲ喜フノ色
アリ墨国政府ト墨民トノ間ニ立チテ調停ノ勞
ヲ取ラシムルガ為メ其議員中ヨリ三名ヲ撰擇シテ維納ニ赴カシメタルニ右ノ
三名ハ既ニ維納ニ達スル度チ叛徒ニ同情ヲ表
スル者ヲ宣言セリ顧フニ當時英傑コシュトヲ
首領トシテ新タニ兵制ヲ定メタル洪加利政

府トシテ若シ速ニ進ミテ維納ノ叛徒ニ声援ヲ與フルコトアラムニハ墺帝ハ其首都ヲ恢復スル能ハスシテ遂ニ滅亡ヲ招致シタルナルベキモ洪加利政府ハ十月下旬ニ至ルマデ其ノ兵ヲ進ムルコト能ハザリシヲ以テ維納モ亦プラーグト均シク ウインヂスクラーツ公ノ兵ニ砲撃セラレ十月三十一日遂ニ其ノ征服スル所トナレリ然レドモ墺帝ノ兵カ再ビ維納ヲ占領シ終ニ帝ハ既ニ全勝ヲ得タル者ナリト言フハ大早計ノ言タルヲ免レズ当時洪加利人ハ悉ク起リテ帝ニ叛キ而シテ デンビンスキ及ビベム等ノ指揮ヲ受ケタル波蘭土ノ義勇兵又陸續来リテ之ヲ援ケ其ノ勢ノ強盛ナル殆ンド得テ嘗ヘベカラズ而シテ他方ニ於テハフランクフオルトノ議會ハ墺国政府ニ對シテ既ニ公然敵意ヲ表明シ間接ノ手段ニ由リテ墺国ヲ日耳曼帝国ヨリ除カムト欲シ其審議中ニ係ル日耳曼帝国ノ憲法中ニ左ノ如キ條文ヲ設ツルニ決シタリ云ヘリ

『凡ソ帝国ノ土地ハ日耳曼領ニ非ザル国ト相合スルヲ得ス

『若シ日耳曼領ノ一国ガ日耳曼領ニアラザル一国ト同一ノ君主ヲ戴クトキハ此ノ二国ノ関係ハ一ニ個人的合同ノ原則ニ本キテ之ヲ規定スベシ』

右ノ規定ハ其ノ所領ノ全部ヲ以テ日耳曼帝国ニ加入セムト欲シタル墺国ヲ排斥スルガ為メニ設ケタル者ニシテ墺国政府ハ日耳曼帝国

ハ憲法中ニ此規定ノ存スルガ為メニ或ハ其ノ
國ノ統一及ビ中央集權ヲ実行スルノ素志ヲ放
擲スルカ或ハ自ラ日耳曼聯盟ヨリ分離スル
二者必ズ其ノ一ヲ擇マザルヘカラズ故ヲ以テ墨
國政府ハ大ニフランクフオール議會ノ措置ヲ憤
ホリ維納ノ騒乱中議會ヨリ送レル視察員
ヲ捕ヘ裁判ノ手続ヲ履ムスルニ及バズシテ之ヲ
死刑ニ處セリ然レドモ此ノ如ク暴雷無法ナル
復讐的行為ハ「ハブスブール」家ノ威信ヲ保
ツニ於テ固ヨリ纖毫ダモ裨益スル所アラザリ
キ

（十）

是時ニ方リ四邊ノ形勢ハ均シク墨國ニ不利ナラシ

トシ伊太利ニ於テハ「キエストザー」ノ戰後革命
ハ一時其ノ跡ヲ藏メリト雖ドモ日ナラズシテ再
ビ其ノ頭ヲ擡ゲ出ダシ而シテ其ノ主トシテ敵
意ヲ挾メル者ハ墨國政府ニ外ナラズ故
ニ八月ニ至リ墨國ノ兵ハロンバルヂーヲ回復シテ
再ビ「パルム」及ビ「モデーヌ」ノ兩公領地ヲ占領セリ
ト雖モ更ニ進ミテ法王ノ領土内ニ侵入セムト
欲スルヤ「ボロー」三市ノ人民ハ起リテ墨軍ニ反抗
シ遂ニ之ヲ市外ニ駆逐シタリ而シテ法王「ピー」九
世ハ其首相「マミヤニー」ガ墨王ト戰ヲ開カムコトヲ
主張スルヲ肯カズシテ遂ニ其ノ職ヲ罷免セリ
ト雖モ法王ノ臣民ハ法王ヲ強制シテ必ズ其ノ
要求ヲ納レシメムト欲シ八月下旬ニ至リ羅馬ニ

於テハ伊太利全国ヲ代表セル議會ヲ同市ニ招集
シ之ヲシテフランクフオールノ議會ノ目的ニ於ケル
ト同一ノ事ヲ為サシムベシトノ説ヲ唱道スル者ア
リナープル王ハ九月五日ヲ以テ再ビ其ノ議會ヲ解
散シ兵カヲルテシル熊ヲ征服セムト欲シ將軍
フイランジリーヲシテメシーヌ海峡ヲ砲撃セシメタ
ルモ英仏二國ハ其ノ將ニ勝ヲ得ムトスルノ際ニ
乗リテ干渉ヲ加ヘ強ヒテ其調停ヲ容レテ九月
十六日パレルムノ軍隊改府ト俱ニ休戰条約ヲ
締結セシメタリ之ト同時ニ英仏二國ハピエモンノ
求メニ応ジ墺國ト於テ和ヲ開キ其ノ版圖ヲ擴張セ
シメムト欲シピエモンシヤルヽザルベールハ二國ノ援ヲ
得テ大ニ更ニ意ヲ強クシテ急進党ハ百方
王ニ迫リテ再ビ墺國ト戰ヲ開カシメムコトヲ計
レリ既ニシテ十月ニ至リ維納ニ於テ第三回ノ変
亂アリテ其ノ報ノ伊太利ニ達スルヤ人心益ヽ動
揺シ墺兵ノ大部ノダニューブ方面ニ抑留セラレタ
ルヲ視テ伊太利人ハ皆均シク其ノ事ヲ羨クルノ
時様ニ達セリト呼號シキユストザーノ敗辱ニ報フハ
應ニ近キニ在ルベシト思料シマシ及ビペープノ統治
セルヴニース人ハ先ツ起リテ墺兵ニ抗シ十月十日ノ
交ニフイウリルニ於テ撃テ大ニ破リチユリニ於テ
ハロンバルヂーノ亡国者市内ニ一ノ開議ヲ開キ墺
國ニ對シテ矯激ノ議論ヲ唱フルコト猶ホ其ノ
ミラノニ在リシ時ノ如クシテシヤルヽザルベールハ彼
等ノ力能ク ロンバルヂーヲ煽動シテ墺國ニ叛カ

シムルニ足ルベシト思料シテ益〻其ノ野心ヲ熾ニシ
トスカースニ於テハ従来フロランス及ビリヴールスノ二市
ヲ開カセル伊太利立憲党アリテモンタネリー及
ビ倶ニ其ノ政権ヲ掌握シタリ然レドモ伊太利
諸市ノ中単余党ガ最モ其ノ勢ヲ逞クセルハ羅
馬ノ右ニ出ツルハナシ但ダ又勢力タル極メテ厭フ
ベキ一大罪悪ヲ犯シテ獲タル者ニシテ之レカ為メ
伊太利ノ独立ノ事業ニ一種ノ汚点ヲ留メタルハ良
トニ痛惜スベキナリ是レヨリ先キ法王ピー九世
ハ往キ仏王ルイ、フイリップニ事ヘテ在権大使トナ
リ而シテ二月ノ革命ノ事変後仏国ヲ去レルロシー
ヲ聳ケテ其首相ニ任シタリシニ法王ノ近侍等ハ
皆ロシーヲ以テ自由青義ノ人ナリトシテ大ニ之ヲ

厭ヒ而シテ民間党ハ助チ之ニ反シテロシーヲ守リ
党ノ代表者ナリト思料シ彼レガ往キニギゾーノ政
策ニ恨賛シタル経歴ハ痛ク奏稀ノ猜忌ヲ招キ加
フルニ彼レモ亦伊太利全体ニ通スル憲法ヲ制定
スルノ説ヲ排シテ唯ダ諸君主ノ同意ニ乗ジテ解
邦ヲ設ケムト欲シ法王ニ勧告シテ敢テ墺国ト戦
ヲ開クコト勿ラシメ意太利独立ノ問題ハ其解釋
ヲ他日ニ譲リテ敢テ之ヲ意トセザルノ状アリ故ニ
彼レハ羅馬ニ於テ痛ク人望ヲ失ヒ十月十五日将ニ
議院ニ赴キテ其ノ政策ヲ説明セムトスルノ途次
一凶漢ノ刺殺スル所トナリ而シテ何人モ敢テ其ノ
凶漢ニ逮捕ニ力ヲ尽クス者ナク狂熱スル人民ハ
此ノ殺害ヲ以テ愛国党ノ勝利ナリトナシ群ヲ為

シテ法王ノ宮殿ニ乱入シ以テ革命党ノ政綱ヲ実
施セムコトヲ迫リシニピー九世ハ半ハ暴徒ノ勢威
ニ屈従シ立憲議會ノ開設及ヒ憲心ヒ発スル宜
戦ノ問題ニ就キテハ敢テ可非ノ言ヲ為スコトアー
ラザリシモ三月以下民主党ノ首領ヲ撃ケ
テ其ノ内閣ヲ組織セシメ以テ楽論ニ満足ヲ與
ヘムコトヲカメタリ然レドモ之ト同時ニ法王
羅馬ニ於テハ其ノ威権全ク地ニ墜チテ其ノ
行動一モ自由ナル能ハザルヲ憂カリ逃レテ
他ニ赴ムカムト欲スルノ意アリ但ダ法王ハ果シテ
何レノ所ニ其ノ身ヲ寄セムトスルカ仏國政府ハ
其ノ或ハ懐柔ノ保護ニ其ノ身ヲ托セムコトヲ恐
レ急ニ法王ニ向ヒテ之ヲ自國ニ招請セムト欲スル

ノ意ヲ通シ且ツ若干ノ兵ヲ発シテ法王ヲ迎ヘ
ムコトヲ計レリト雖ドモ法王ハ敢テ伊太利ノ
地ヲ離ルヽヲ欲セズ又仏國ノ如キ共和國ノ保
護ニ其ノ身ヲ托スルヲ欲セズ而シテ他方ニ於
テハ彼レハ敢テ伊太利独立ノ挙ヲ非認スルガ
如キ挙動ヲ事トスルヲ欲セザルヲ以テ亦懐柔
ニ属シタル土地ニ退クコト能ハズ故ニ法王ハ当時
伊太利ノ君主中最モ保守ノ思想ヲ有シタル
ナープル王ニ其ノ身ノ保護ヲ托スルニ決シ十一
月廿四日ノ夜ニ服ヲ変シテ密カニ羅馬ヲ逃レ日
ナラズシテガエートニ達シタルニナープル王フエル
ヂナンド二世ハ禮ヲ厚クシ之ヲ迎ヘタルヲ以テ法
王ハ幸ヒシテ其ノ身ノ難ヲ免ルヽコトヲ得タリ

ト雖ドモ革命党ハ爾来益〻其ノ猖獗ヲ逞リシ
久シカラズシテ將ニ伊太利半島ヲ挙ケテ一大騒
乱ヲ發セムトスルノ勢ヲ呈シタリ

（十二）

以上記述スルガ如クナルヲ以テ當時墺国ノ勢力ハ
殆ド其ノ衰退ノ極ニ達シタリシガ フヲルヂナン一世
ハ此ノ時ヲ以テ新タニ勇對果決ノ一改治家ガ
ルゼンベルグ公ヲ獲テ之ニ其ノ政柄ヲ托シ由リテ以テ
再ヒ其ノ勢力ヲ挽回スルヲ得タリ スワルゼンベルグ公
ハ十一月廿日新タニ墺国ノ首相ニ任ジタリシガ
其ノ革命思想及ヒ民主肯義ノ進歩ヲ好マ
ザルハ其ノ師メテルニヒニ異ナルコトナキモ公ハ
其ノ年尚ホ若キガ為メメテルニヒヨリモ層粗

暴ニシテ権変ノ才ニ乏シク徒ラニ倨傲尊大ヲ事
トシテ人ニ下ルヲ欲セズ且ツ其ノ身ヲ軍伍ヨリ
出タシタルノ故ニ由リ專ラ武斷政策ヲ好ミ
若シ能クスベクムハ兵馬ノ力ヲ以テ制令ヲ歐洲
全土ニ下タサムコトヲ望メリ而シテ公ハ其ノ職
務ノ始メニ於テ峻厳果敢ナル措置ヲ施シテ
其ノ胆力ヲ示サムト欲シ十一月廿七日フランクフオール
ノ議會ニ一通ノ公文ヲ送リシガ其ノ公文ノ趣旨
ハ(一)彼レハ墺帝国ノ統一ヲ保ツヲ以テ其ノ主
一ノ目的ト為スト言フニ在リ是レ明カニ前ニ示シ
タル日耳曼帝国ノ憲法ノ條項ニ背馳スル
者ナリ(二)日耳曼帝国憲法ハ墺帝自ラ之ヲ査
閲シテ必要ノ場合ニハ改刪ヲ施コスノ権利ヲ有

スルニアラザレバ之ヲ公認スルコト能ハスト云フニ
在リ且ツ亡ク日若シ夫レ墨国ト新日耳曼トノ
関係ニ就キテハ此二者済シク其ノ再興ノ事業ノ
実能ク結合ノ制度皆能ク畢国ニ至ルヲ待チ
テ始メテ之ヲ協定スルモ未ダ以テ晩シトセズ此ノ
時ニ至ルマデ墨ハ能ク其ノ義務ヲ竭リスヲ
怠ルコトナリ亡ハ外国トノ交渉ニ於テハ吾等ハ
主トシテ墨国ノ体面ト利益トヲ保護シ尚
モ自餘ノ勢力ノ為ニ為ス所ノ業外ノ
経営ヲ妨クコトアラバ吾等ハ決シテ之ヲ不問ニ措
カサルベキナリトト
其ノ後数日ヲ経テ十二月二日ニ至リスワルゼンベルグハ
年少クシテ政治上ニ於ケル過去ノ経歴、経験累

有セサル新帝ヲ戴クヲ以テ自己ノ行動ヲ自由
ナラシムル所以ナリト思料シ懦弱暗愚ナルフロ
ルヂナン一世ヲ説メテ其ノ位ヲ嘗年十八歳ナルフ
ランツアー、ジヨゼフ大公ニ譲ラシメ次ヒテスワルゼンベルク
ハフランクフオール議会ノ議事ガ久シキニ亘リテ容
易ニ決セザルヲ視テ其ノ間毒ヲ力ヲ洪加利ニ
用ヒテ東方ニ其ノ騒乱ヲ鎮定セムト欲シ又伊
太利事件ニ関スル決和ハ故ラニ遷延久シキニ彌
ラシメ其ノ調停ニ任シタル英仏ノ二国ガ列国会
議ヲブリユツセルニ開キテ伊太利問題ヲ決定スベ
シト言フノ説ニ同意ヲ表スルノ状ヲ装ヒテ而モ
到底列国ノ兼務スル能ハザル諸種ノ条件ヲ
提出シ以テ其ノ開会ノ期ヲ延ハサムコトヲ計レリ

而シテ佛國ニ於テハ十一月四日普通撰擧ヲ基本トシテ新タニ民主的憲法ヲ制定シ十二月十日ヲ期シテ大統領ノ選擧ヲ行ハムト欲シ國人皆ソノ意ヲ之ニ注ギテ復タ他ヲ顧ミルノ暇ナク既ニ其ノ選擧ヲ行フヤルイー、ナポレオン、ボナパルトハカベーニヤウクトノ競爭ニ勝チテ大統領ノ選ニ當リシモ其当選ハ主トシテ舊教徒及ビ王党ノ援ニ出デタル者ナルカ故ニナポレオンハ當時ニ在リテ勢ヒ意太利ノ革命党ニ其ノ援ヲ俺スコト能ハズスワルゼンベルグハ能ク其ノ然ルヲ察シアルプ山麓ニ屯ロセル仏兵ノ毫モ恐ルヽニ足ラザルヲ知リ其全力ヲ洪加利ニ傾注スルモ絶正テ後顧ノ患アラズトナシ十二月十日ウインヂスグラーツ及ヒゼラシウクノ二將ヲシテペスト市ニ向ハシメ一ケ月ヲ出テズシテ同市ハ再ビ墺軍ノ占領スル所トナリコストハ其ノ同僚ト倶ニベブレゼンニ退キ洪加利ノ独立党ハ手ヲ拱シテ空シク其ノ敗滅ヲ招クノ外ナキニ至レリ

然レドモスワルゼンベルグノ洪加利ニ對スル鎮壓政策ノ着ハ其ノ功ヲ奏スルニ際シ日耳曼及ヒ伊太利ニ於テ再ビ動揺ノ兆ヲ現ハシ墺國政府ハ其ノ備フルガ為メ急ニ其ノ洪加利ニ於ケル運動ヲ中止シタリ

（十二）

墺國政府ガフランクフオールノ議會ニ十一月廿七日ノ公文ヲ送リシ以來日耳曼ノ立憲党ハ益々

「ハブスブルグ」家ヲ厭フテ心ヲ普王ニ寄セ議會ノ
多數ハ之ヲ日耳曼皇帝ニ推戴セムト欲スル
ノ意アリ然レドモ是レ必ズシモ普王ニ對シテ
十分ノ同情ヲ有シ十分ノ信用ヲ與フルカ為メニ然
ルニアラズ蓋シ普王其ノ忍想錯乱混淆シテ
絶エス諸種ノ計畫ヲ立テ絶エズ撞着矛盾
シタル忘想ヲ攝ヘ時トシテ自ラ自由肯義ヲ抱
持シタリト忍料スルコトアルモ其ノ実ハ終始神
權說ニ偏倚シタル者ニ外ナラズ而シテ王ノ弟ニ
シテ又其ノ王位ノ継承者タルギーオーム親王ハ其
ノ革命党ト相善カラザルノ故ニ由リテ往キニ英
國ニ逃レタリシニ王ハ數月前之ヲ本國ニ召還
シ且ツ封建專制ノ兩說ヲ株守シタル一派ノ

党人ヲ狎親シテ事ゴトニ其ノ言ノ所ニ從ヘリ該
党派ハ史家ノ呼ビテ『田舍紳士党』若クハ『ルテー十字』
架党』ト為セル者ニシテゼルラーヒスタールノ諸人
之レガ牛耳ヲ執リ而シテ未来ノ大宰相ビスマルク
モ亦此ノ党中ニ在リテ盛ニ民主肯義ノ改革ヲ
攻撃シ既ニ大ニ世人ノ注目スル所トナレリ該党ハ
其ノ素論トシテ人民ハ自由ニ其ノ君主ヲ擇
ブノ權利ナシト稱シ王ニ說キテ日耳曼人民
ヨリ帝位ヲ受クルナカラシメ墺國ガ保守肯義
ヲ代表スルノ故ニ由リ之ヲ援ケテ革命思想ヲ撲
滅セムコトヲ望メリ而シテ普王ハ該党ノ說ヲ容
レテ當時伯林ニ起リタル群民ノ暴動ヲ鎮壓
スルニ頗ル粗暴ノ措置ヲ事トシ伯林ヲ含圍地ト

ナシテ代議院ヲブランドブールグニ遷シ次ヒテ之ニ
解散ヲ命シ其ノ内閣員ニハ專ラ保守肯義ノ人
物ヲ用ヒ其ノ近亟ニ對シテ日耳曼ノ諸君主ノ
自由ノ選擇ニ由ルニアラスムバ皇帝タルコトヲ欲
セズト稱シ以テ革命肯義ト俱ニ一切ノ調停ヲ
遂グルコトヲ欲セザルノ意ヲ諷示セリ然レドモ
普王ハ亦ヨリ以然右ノ如キ言ヲ為シタルニアラズ
而シテ其ノ内心ニ於テハ夙トニ日耳曼ノ帝冠ヲ
獲ムコトヲ切望セサルニアラズ故ニ王ノ意向
ヲ測度スルガ為メニフランクフオールノ議會ヨリ
派遣セラレタル ガゼルンハ十一月伯林ニ來リテ
若シ議會ヨリ帝冠ヲ王ニ捧クルトキハ王ハ必
ズ之ヲ受ケテ辞セサルベク而シテ若シ僕國

ヲ日耳曼帝國ヨリ除去スルトキハ自餘ノ諸
國ハ必ズ普王ノ強制スル所トナリテ貢ノ帝位
ニ即クヲ拒ムコト能ハザルベシト思料シ乃チフラン
クフオールニ帰リテ貢中ノ議會ニ報告セリ是
ノ時ニ方リ王ノ輔臣將軍ロドウイッツ及ヒバンセン
ノ輩ハ切リニ王ニ説キテ十字架党ノ説ヲ斥
ケ以テフランクフオールニ於ケル立憲党ノ歓心ヲ
収メムト欲シ而シテ王モ亦漸ク其ノ説ニ耳ヲ
傾ケ十二月五日王ハ遂ニ普國ノ為メニ殆ムド民
主肯ノ義ニ循擦シタル一ノ憲法ヲ発布シ仍テ
自ラ説ヲ為シテ云ク而モ其ノ憲法ニシテ君
王ノ自由意思ニ出テ賜与シタル者ナルトキ
ハ毫モ神權説ト相容レザルノ理ナク而シテ

君主ハ他日ニ至リテ自由ニ其ノ賜ヲシタル憲
法ヲ奪還スルコト亦猶ホ今日自由ニ之ヲ賜
フヲシタルカゴトクナルヲ得ベシト然レドモフル
ンクフオールノ議會ハ王室ノ内心ニ於テ思料スル所ノ
如何ニ係ラズ十二月五日ノ憲法発布ヲ以テ王室ガ新
日耳曼ト相提携シテ進マムトスルノ致ス所ナ
リトナシテ大ニ其ノ擧ヲ稱揚シ而シテ豫シ
メ王室ヲ牽制シテ妄リニ專横ヲ事トスル勿ラ
シムルガ為メ日耳曼國民ガ其ノ將来ノ首
長ニ對シテ要求スルヲ得ベキ各般ノ保障ヲ
憲法ニ規定シタルノチ始メテ其ノ帝冠ヲ
普王ニ授ケムコトヲ朝セリ
夫レ此ノ如ク議會ガ普王ニ心ヲ寄スルコト

明白疑ヲ容ルベカラザルニ至リタレバ始メヨリ
其ノ心ヲ佛國ニ傾ケタルスメルリング内閣ハ益
ニ其ノ職ニ留マルコト能ハズ十二月中旬ニ至リ
テジヤン大公ハ新タニ内閣ヲ組織シ普國党ノ領
袖アンリード、ガジエルンヲ以テ之レガ首相ニ任シタル
ニガジエルンハ其就職ノ始メニ於テ明カニ佛王ヲ日
耳曼帝國ヨリ排斥スルノ議案ヲ議會ニ提出
シタリシカバ佛相スワルゼンヘルグハ大ニ之ヲ憂慮
シテ百方抗言ヲ試ミタルモガジエルンハ毫モ之ニ
耳ヲ傾ムクルコト肯ムセズ而シテ議會ハ益ニ
ガジエルンノ提議ヲ容レテ一月十四日佛國皇帝ハ
日耳曼人種ノ一邦ト日耳曼人種ニアラザル
一邦トノ間ニ改治上ノ合同ヲ為スコトヲ禁止シ

タル憲法ノ條文ニ循由スルニアラズムバ日耳曼
帝國ニ加入スルコトヲ得ベカラズト議決シタリ
然ルニ墨國政府ハ尚ホ固ク執リテ其ノ版圖内
ニ於ケル日耳曼人種ノ國トヲ分別スルヲ肯ムセザルヨリテ其ノ勢
ヒ遂ニ日耳曼帝国ノ國体ヨリ脱セザルヲ得
ベカラザルニ至リタリ

（十三）

然レドモ墨相スワルゼンベルグハ尚ホ議會ノ決議
ニ異議ヲ唱ヘ而シテ務メテ其ノ時日ヲ遷延スル
ガ為メ普國ト俱ニ決ヲ闕キタルニ普王フ
レデリック、キーオームハ終始專制党ト日耳曼統
一党トノ中間ニ介立シ避疑逡巡シテ敢テ墨ヤ

ト断ツコトヲ欲セズ其ノ日耳曼帝國ノ大政ヲ
統フルノ希望ヲ棄スルト同時ニ亦其ノ怨ヲ
他國ニ結ブコトナカラムト欲シ一月廿三日ノ
必文ヲ発シテ佛頭先ツフランクフオールノ議會ニ於
テ制定シタル憲法ガ果シテ日耳曼諸邦ノ君主
ノ承納スル所トナラバ自己モ亦敢テ之ヲ拒斥セ
ザルヲ宣言シ次ヒテ更ニ墨國ヲ日耳曼帝國
ヨリ除クノ必要ナキヲ述ヘスワルゼンベルグガ想像セル
ガ如キ大日耳曼（グランド、アルマーニュ）ヲ組織セルハ必ズシモ難キニアラ
ズト為セリ但ダ其ノ言ニ據ルトキハ墨ハ日耳
曼帝國ニ於テ單ニ名譽上ノ上位ヲ占ムルニ止マリ
其ノ主要ノ任務ハ專ラ外ニ向テ日耳曼ノ勢力
ヲ張シ伊太利並ニ「スラーヴ」人種ノ極東（極西）ニ位セル東

方ノ諸州ヲ征服スルニ存シテ而シテ日耳曼ノ本
土ハ其ノ中ニ在ル諸君主ノ自由ノ合意ニ由リ普魯
ヲ中心トシテ一團体トナリ以テ其ノ政治的及ビ
軍事的合盟ヲ組織スルコト猶オ其ノ関税同盟
ヲ組織シタルガ如クナルベキ者トス顧フニ普魯ノ
此ノ方案タル徒ラニ架空ニ亘リ錯綜ヲ極メタルガ
如シト雖ドモ實ハガゼルンノ方案ト均シク墺
剛ヲ日耳曼ヨリ排除セムト欲スル者ニシテフワル
ゼンベルグガ寸ムシテ此ノ方案ニ同意ヲ表スベシ
ト思料スルハ蓋シ亦迂濶ノ甚シキ者ト言ハザ
ルベカラズ果セル哉スワルゼンベルグハ普魯ノ提案
ヲ以テ墺帝ニ義シ無禮ヲ加フル者トシ二月四日
墺國ハ決シテ日耳曼帝国ヲ除カルヽヲ兼諾スル

コト能ハズ又フランクフオールノ議會カ今將ニ建設
セムトスルカ如キ統一的政府ヲ日耳曼ニ於テ認
ムルコト能ハスト宣言シ而シテ普相ブラントブールグ
ハ之ニ答フルニ方リ一方ニハカメテ墺國政府ノ歓
心ヲ繋クト同時ニ他方ニハフランクフオールノ議會ノ
意ニ戻ルコト勿ラムト欲シ故ラニ曖昧模稜ナ
ル言辞ヲ用ヒテ普魯ハ決シテ日耳曼帝國ノ
政府ニ立憲党ノ唱道スルガ如キ廣大ナル權力
ヲ與フルヲ可トセザルモ而モ將来日耳曼ノ首長
タル者ハ各地方政府ノ職權ヲ併呑セザル程度
ニ於テ務メテ其ノ權力ヲ強クスルノ必要アリトナ
シ而シテ之ト同時ニ彼ハ墺政府ニ向ヒ日耳曼
帝國ノ組織ニ関シテ其ノ意見ヲ陳ヘムコトヲ求

メタルニスワルゼンベルグハ之ニ應シテ一個ノ方案ヲ提出シ、ガ其ノ方案ニ拠レバ日耳曼國民ノ為メニ其ノ代表機関ヲ設クルコトナク唯ダ一ノ聯邦議會ヲ設ケテ諸邦ノ君主独リ之ニ代表者ヲ出タスノ権利ヲ有シ而シテ其ノ議會内ニ於ケル投票権ノ配置ヲ巧ミニ操縦シテ常ニ多数ヲ制スルコトヲ得セシムヘモノトス此他猶ホスワルゼンベルグハ同書中ニ於テ一ハブスブルグ家ノ領有スル一切ノ版図ヲ挙ケテ日耳曼聯邦ニ加盟セシメ往年雖納會議ニ於テ定メタルカ如ク又ハ伊太利、洪加利ノ諸州ヲ其中ヨリ除ノナカラムコトヲ主張シ次ヒテ更ニ三月四日ニ至リ是ヨリ先キ墺軍ガ洪加利ニ於テ一タビ勝利ヲ獲タルニ押シ日耳曼ノ民心ヲ激昂セシムルヲ顧ミズシテクレミモ日ノ議會ヲ解散シ墺帝ヲシテ新タニ一ノ憲法ヲ発布セシメ墺領ノ各部ヲ合シテ一体ノ政治的團体トナシ一体ノ代表機関ヲ設ケテ各部人民ノ統一ヲ遂ケムコトヲ企ダテタリ

（十四）

是時ニ方リテ洪加利人ハ亦ノ戦備全ク成リテ進ミテ墺軍ニ迫ラムト欲シ而シテ伊太利ノ軍余党モ亦日ニ丈勢力ヲ得テ将ニ戦ヲ墺ニ挑マムトス此ノ時ヲ以テ墺政府ハ敢テ前述ノ如キ新憲法ヲ発布シテ其ノ版図内ニ於ケル異人種ノ不平ヲ招致スルヲ厭ハズ是レ実ニ無謀ノ甚シキ者ト言ハサルベカラズ

果ヨリ先キ羅馬府民ハ屢バ法王ニ乞フテ羅馬ニ還ラシメムト欲シタルモ其ノ聴ク所トナラザリシヲ以テ十二月十九日ニ俄ニ府ノ組織シテ三頭領（トリブニヴィラー）ヲ選任シ伊太利国會ノ開設ニ至ルヲ待チテ先ツ法王領ノ人民ノ為メニ普通選挙ノ制ヲ定メ以テ其ノ立憲議會ノ選挙ヲ行ハシメ而シテ其ノ選挙ヨリ生レル立憲議會ハ翌年二月五日羅馬ニ於テ其ノ會ヲ開キ四日ヲ経テ共和政府ヲ創立スルノ告示ヲ發シタリ既ニシテ伊太利ノ改革者中亦モ有力ニシテ又且ツ亦モ有名ナル マジニー ハ三頭領ノ一ニ撰ケラレテ其ノ勢力頗ニ同僚ヲ壓倒シ當時既ニ其ノ名声ヲ世上ニ博シタル ジヨセフ カリバルヂー モ亦タ

来リテ執政共和政府ノ為メニ其ノ力ヲ竭クサムト欲シ本島内ノ各地ヨリ義勇兵ノ来リテ其ノ麾下ニ投スル者陸續踵ヲ接シ共和主義ハ日ナラズシテ羅馬ヲ ドスカーヌ ニ倚横シ ドスカーヌ ハ法王ト均シク其ノ國ヲ捨テ、ガエート ニ走リ二月十八日フランス ニ於テ新タニ共和政ノ設立ヲ布告シタリシガ是レヨリ後チ共和主義ハアプナン地方ヲ風靡シ進ミテ ピエモン 王国ニ侵攻セムトスルノ勢ヲ呈シタリ

ピエモン王 シャルゼルベール ハ以上ノ事態ヲ月撃シテ憂懼措クコト能ハズ當時民主主義ハ既ニ チエウ ニ蔓延シ民主党ハ夙ニ シャルゼルベール ガ懦心ニ出シテ果断ノ措置ニ出テザルヲ怨ミ遂ニ

之ニ迫リテ新タニ内閣ヲ組織セシメ民衆ノ意
ヲ迎ヘテ專ラキユストボーニ於ケル戦敗ノ辱ヲ雪
カムコトヲ唱道スル ジオベルチー及ヒラタジーノ二
人ヲ以テ内閣員ニ列セシメタリ但ダ其ノ新内
閣モ亦ピエモンノ王政ヨリ亡ボスヲ欲セズシテ童
ダニ共和青義ノ其ノ国内ニ傳播スルヲ制
止スルノミナラズ フロランス及ビ羅馬ニ於テモ亦速
カニ立憲君主政ノ復立ヲ視ムコトヲ希望
シタリ而シテ ジオベルチーノ方案ニ依レバナルデニユ
王ハ宜シク先ツトスカーヌ大公及ビ法王ヲ援ケ
テ其ノ位ヲ復セシメ然ル後チ之ヲ議フテ
相俱ニ懐王ニ業ス伊太利独立ノ十字軍
ヲ起スベシカラズ 以為フ 斯ノ如クナルトキハ半島

統一ノ業ヲ擘クルコト難キニアラズト
右ノ方案ハ亦能ク佛国政府ノ同意スル所ナレリ
蓋シ仏国ニ於テ新タニ大統領ニ任シタル ルイー
ナポレオンハ一方ニハ宗門ノ迫ル所トナリテ其ノ歓心
ヲ失フヲ欲セザルヲ以テ法王ピー九世ガ速カニ
羅馬ニ帰来セムコトヲ希ヒ而シテ他方ニハ何カナ
ル事アリトモ懷国ガカヲ法王ニ仮シテ羅馬ニ帰
来セシムルヲ願ハズ独リ サルデニユ王及ビ ナーポル王
ノ力ニ由リテ法王及ビ トスカーヌ大公ノ位ヲ復セムコ
トヲ望ミタルナリ然ルニ ジオベルチーハ直チニ佛
国政府ノ意見ニ同意ヲ表セリト雖ドモ其ノ他尚
ホ ナーポル王 フロルチナニ在モ亦ト同一ノ意見ヲ
有シ而シテ其ノ国ヲ逃レタル法王及ビ トスカーヌ

大公モ亦之ヲ可納セザルベカラズ然レドモ此三者ハ
肯テ佛國ノ提議ニ同意ヲ表スルコトナク十二月
四日ピー九世ハ單ニ伊太利ノ諸國ニ貢ノ救援ヲ
求メズシテ汎ク歐洲諸國ニ其ノ
救援ヲ求メタルニ西班牙ニ於テハ當時尚ホ保守
党ノ ナルヴァズ 丈政柄ヲ掌握シタリシガ同月
廿一日法王ノ要求ニ答フルガ為メ ガエートニ於テ歐
教法國ノ會議ヲ開クノ提議ヲ出ダシタリ而シ
テ ジオベルチー ハ二ヶ月ノ間百方法王ヲ勸誘シテ
前矢ニ述ヘタルガ如ク專ラ伊太利ノ諸君主
ノミヲ糾合スルノ策ヲ取ラシメムト欲シタル
モピー九世ハ ナルデニユー王ヲ以テ革命党スル
者トナシ却テ貢ノ援ヲ受クルコトヲ

拒ミナープル王モ亦ナルデーニユ王ト事ヲ俱ニス
ルヲ欲セズ而シテ僕國政府及ビ之ニ從屬セル諸
カース大公ハ全力ヲ傾注シテ ナルデニユー王ノ政
策ヲ排擊シ加フルニピー九世ハ翌年二月十八
日ヲ以テ公然佛、墨、西及ビツーシル ノ諸國
ニ干渉ヲ要求シタルヲ以テチユラン内閣ノ希
望ハ全ク水泡ニ屬シ貢ノ首相 ジオベルチー ハ
革命党ニ疑ハレ保守党ニ厭ハレテ遂ニ貢ノ
職ヲ辭スルノ已ムヲ得ザルニ至リ是ニ至リテ
シヤルヂルベール ハ果シテ何カナル措置ヲ欲スカ
彼レ若シ久シク墨國ト戰ヲ開クコトヲ拒ム
トキハ必ズヤ共和党ノ迫ル所トナリテ貢位ヲ
失ハザルベカラズ蓋シ当時墨國ト戰ヲ開クノ

一幸ハピエモンヲ始メ伊太利ノ大部ニ於テ人民ノ事ヲ唱道セル兵ニシテ此時ニ至テ幸ラシテ開始シタル ブリニッセールノ決ハ僕相スワルゼンベルグノ権略ニ出ツ敵ヲ緩慢決スル兵ナク伊太利ノ全国党ヲシテ大ニ其ノ望ニ失ハシメ僕忠ハ遂ニ尺寸ノ地モ之ヲ讓歩スルヲ肯ムセズ而シテシヤル、ザルベール ハ其ノ人民ノ逸ル所トナリテ僕忠ト戦ヲ開カムトスルモ羅馬及ビ フロレンスノ兵和党ノ事ヲ已レヲ撲クルノ望ナク而シテ其ノ軍兵ハ キユストザーノ大敗以来其ノ意氣全ク沮喪シテ斜陽僕軍ノ敵ニアラザルヲ覚ラザルニアラズ然レドモ其ノ主領ノ名譽ト利益トハ而其ノ久シク座務蹉躇スルヲ許サズ故ニ

彼レハ三月十二日ヲ以テ休戦ノ約盟ニ破レタリト宣言シ先年ト均シク伊太利全国ニ檄シテ亜氏的ノ戦ヲ開カムコトヲ昭告セリ

（十五）

サルデニヤー王ハ僕忠ノ歩ニ出ヲ怨ルベキノ敵ニアラズ然レドモ其ノ兵ヲ把シテ戦ヲ僕忠ニ挑メルノ結果ハ僕忠ニ対シテ益ス困難ノ地位ニ陥ラシメ フランクオールノ議会ハ僕忠ニ対シテ一方ニハ洪加利人ト鬻ヲ絶キ他方ニハ伊太利人ト雑ヘタルヲ見テ彼メ其ノ国軍ヲ妨害スルノ力ヲ有セズト思料シ乃チ表ヲ決シテ高後ノ大主誓ヲ奬ヘムト欲シ三月四日突然新憲法ヲ多布シ同月十二日更ニ議会ニ

於テ普魯西ヲ推シテ其盟主ノ日耳曼皇帝トナスノ議案ヲ提出シ而シテ貢ノ第一回ノ投票ニ於テ民主党ハ普魯西ニ貢ノ投票ヲ與フルヲ拒ミ久ルモガジ卜ルンノ党派ヲ大ニ讓歩スル所アリシヲ以テ亦遂ニ普魯西ヲ帝ニ戴クコトヲ承ウセリ曩ニ於テ日耳曼帝国ノ憲法ハ貢ノ制定ヲ終ハリ普国選挙ノ制度ハ永ク之ヲ存シ皇帝ハ日耳曼ノ政治、軍事及ビ外交ノ首長ニシテ右議院即チ貢ノ一ハ国民全般ノ代議士ヲ以テ組織シタル「ウオルクスハウス」ト貢ノ二ハ聯合諸邦ノ議會ヲ派遣セル委員ヲ以テ組織シタル「スターテンハウス」トニ業シテ責任ヲ負フベキ内閣大臣ノ輔佐ヲ得テ国政ヲ行フベキ者トシ聯邦内ノ諸君主ヲ

派遣セル委員ヲ以テ組織シタル聯邦議會議ハ之ヲ存スルコトナク而シテ皇帝ハ議會ノ決議ニ業シ絶業的ニ貢ノ裁可ヲ拒ムノ權ナキ者トナセリ乃チ以上ノ條件ニ由テ民主党モ亦普魯西ニ投票ヲ與フルコトヲ諾シ子ハ去四十九年三月十八日議會ハ遂ニ普魯西ニ奉クルニ帝號ヲ以テスルニ決シタリ

日耳曼ノ軍隊ハ右ノ如クシテ既ニ貢ノ終ヲ告ケシ者ノ如ク四月四日普魯西ハ議會ヲ貢ノ当選ヲ告知スルガ為メニ派遣シタル委員ヲ引見シ從来屢々揚言セルガ如ク聯邦内ノ諸君主ノ投票ニ由ニ非スムバ正當ナル皇帝タルコト能ハスト稱シテ貢ノ帝號ヲ受クルコトヲ拒メ

リ然レドモ貢ノ語氣ニ據リテ之ヲ畜スルニ至ハ
諸君主ノ投降ヲ獲ルノ必然極ヲ意レザルヲ
信スル者ノカリ而レテ貢ノ投降ヲ獲ルニ至ルマデ
ノ間ハ從來ジャン大公ノ有ニ帰セル日耳曼總
督ノ任ヲ以テ貢ノ身ニ帰スベキ者ナリトナセリ且
ハ又委員ニ向フテ何時ニ論ナリ何所ニ係ルズ
矢ノ矢ノテ貢ノ全力ヲ竭クシテ日耳曼ノ名譽ト
利益トヲ保護スルノ決心ナルコトヲ告ケ而シテ
之ヲ事実ニ証明スルガ為メ貢ノ軍兵ニ令シ
テ再ヒ丁抹ト戦ヲ開カシメスレスウイツグ及ビ
ホルステイン ノ公領地問題ニシテ苟モ日耳曼
祖國ノ希望スルガ如ク解釋セラルヽヲ乞フ公
バ對シテ其ノ兵ヲ解クコト能ハズト声言セ

リ然レドモ一年以来戦轉常ナキ運命ハ此ノ時
ニ於テモ亦更ニ貢ノ居ヲ轉換シ墺國ハ此間ニ
於テ復タ又急ニ其ノ衰勢ヲ挽回シ而シテ普
王ハ更ニ墺國ト相提携スルノ必要已ムヘカラザ
ルニ至リタリ

（十六）

當時墺國ハ一方ニハピヱモンニ對シ他方ニハ洪加
利ニ對シテ同時ニ戦ヲ開キタリシガ其ノピヱモ
ントノ戦ハ一撃シテ墺軍ノ大捷ニ帰セリ老
將パデツキーハ先ツピヱモンヱシヤルヽザルベールニ對
シテ矯激暴慢ナル檄文ヲ発シ次ヒテ三月二
十日大兵ヲ引ヒテテツサン河ヲ渉リ三月ノ後

チピエモンノ兵外ノヴールニ會戰シテ大ニ之ヲ
破ブリピエモン王ハ復タ事ノ為スベカラザルヲ
察シ戰敗ノ即夜王位ヲ其長子ヴイクトル、
エマニユエールニ讓リテ自ラオポルトーニ退隱シ憂
悶病ヲ獲テ久シカラズシテ世ヲ去レリ而シテ
新タニ王位ニ上ボリタルヴイクトル、エマニユエールハ英
佛二國ノ調停ニ由リ三月廿六日辛ラシテ墺軍
ト休戰条約ヲ訂結シ其ノ期限後墺國ハセ
ジヤニ至ルマテノ土地ヲ占領シアレキサンドリー市
ニ其ノ守兵ヲ置ベシト宣メタリ右ノ如クナル
ヲ以テ懷國政府ハ伊太利ノ方面ニ於テハ復
タ深ク顧慮スル所ナキヲ得タリ
洪加利ニ至リテハ之ヲ征伏スルコトモダピエモンノ

如ク容易ナル能ハズ三月四日ノ詔一的憲法ハ洪加
利ノ人心ニ至大ノ激昂ヲ奬勵ノ勢ノ極マル所ハ
將ニ禍ヲ「ハブスブルグ」家ニ及ボサムトシ洪加利政府ハ
大兵ヲ募集シテ盛ニ戰備ヲ修メ四月十四日遂然
洪加利ノ独立ヲ宣言シコストハ貢ノ總統官ニ任シ
テ外交官ヲ列國ニ派遣シタルニ列國政府ハ敢テ
其ノ独立ヲ公認スルコトナキモ亦佯ニ其ノ派遣セル
外交官ヲ優遇スルモノアリ且ツ是より數週前ニ洪
加利ノ兵ハ進ミテ墺軍ヲ攻撃シベンハゼラシウクヲ
拔キ退シテトランシルヴニーニ於テ連戰捷ヲ奏シ刻
ニエーブ河邊ノ公領地排ヲモルメヴイー及ビヴラシーノ
二州ハ將ニ其兵ヲ迎ヘテ軍余ヲ起サムトシゴールゼ
リハ四月下旬ヲ以テ既ニペストヲ回復シ行以墺軍

ヲ破リテ進ミテ雒納ニ迫ラムト欲ス当時若シ
ゴールゼートコストトノ間ニ其ノ意見ノ衝突スルア
リテゴールゼーハ之レカ為メリユード市ノ合圍ニ空
シク一月ヲ費ヤシ次セテ更ニ其ノ兵ヲ按シテ久シク
コモルンニ淹留スルコトナカラムニハ能ク其ノ企ダテ
シ洪加利独立ノ事業ヲ事就シテ道慮ナキニ
至リタルヤ必然枉ヲ象レド然レドモゴールセーノ此
ノ淹留ノ間ニ墨国ハ一ノ有力ナル同盟ヲ獲テ
以テ其ノ危急ヲ免ルヽヲ得タリ
既ニ上文ニ述ベタリシ如ク一八四八年以来露帝
ハ洪加利人ニ業シテ大ニ敵意ヲ表シ波蘭土
及ヒモルタヴイー、ワラシーニ屯在セル露兵ニ令シ
テ屢バ洪加利ヲ威赫セシメ次テ一八四九年

一二月ノ交ニ至リ露將ノ一人ハ若干ノ兵ヲ引
ヒテトランシルヴニーニ侵入シ、ガ洪加利ノ將ベン
ハ移ヲテ之ヲ郤ケタリ既ニシテ三月ニ至リ墨国
政府ハ事ノ危急ナルヲ視テ露国ガ其ノ
兵ヲ出ダシテ洪加利ニ干渉ヲ加ヘムコトヲ請ヒ
シニ露帝ノ清大臣ハ概ネ露帝ニ説キテ肯テ其
ノ援ヲ墨国ニ假スコトヲ勿ラシメムト欲シ以為ヘラ
ク露国ノ為メニ計ルトキハ墨国ヲシテ解体
救フベカラザルニ至ラシムルヨリ善キハナシ墨国ヽ
シテ苟モ衰頽能ク為スナキニ至ルトキハ露
帝ハ其ノ意ノ欲スルガ侭ニダニユーブ地方ト然
レドモ露帝ハ波蘭土ノ亡命者ガ相引ヒテ洪加利
人ヲ援ケ而シテ洪加利人モ亦夙トニ波蘭土ニ

（及ビ東方ノ事ヲ處ヒヲ得ル）

同情ヲ表シ動モスレバ之ヲ煽動シテ露國ニ叛カシメムトスルノ狀アルヲ視テ深ク怒ヲ洪加利人ニ抱キ加フルニ清國ノ帝室中已レ独リ一八四八年ノ変乱ノ為メニ影響ヲ被ルコトナリ依然トシテ專制ノ權力ヲ保有スルガ故ニ歐洲列國ニ對シテ保守主義ノ擁護者ヲ以テ自ラ居リ年年ノ為メニ凌辱ヲ受ケタル諸國ノ君主ニ代リテ其ノ怨ヲ雪ガムト欲シテ更ニ之ニ加フルニ帝ハ其ノ東方ニ於ケル宿望ヲ達スルニハ速カニ墺國ノ危急ヲ救フテ其ノ歓心ヲ收ムルニ若カズト思料セリ是レヨリ先キ露兵ノ墺モルタヴイヤ及ビヴラシーヲ占領シ以来英佛ノ二國ハ書ヲ土廷ノ要求ヲ扶ケテ露國ニ抗議シタリシガ為ニ至リテ遂ニ之ニ迫リテ土廷ト俱ニバルタ、リマンノ條約ヲ訂結シ仍テ日ヲ期シテ二州ノ占領ヲ撤スヘキヲ約セシメタリ此ノ條約露國ハ此ノ二州ニ於テ獲タル所ノ利益亦頗ル大ナラザルニアラズト雖ドモ而モ政治上ニ於テハ到底露國ノ失敗タルヲ免ル、能ハズ故ニ露帝ハ墺帝ニ被ラシムルニ恩ヲ以テシ他日更ニ其ノ援ヲ得テ東方ニ於ケル失敗ノ辱ヲ雪ガムト欲シタルナリ且ツ露帝ハ始メヨリ毫モ自身曼ノ統一ニ同情ヲ表スルコトナク力メテ墺國ノ勢力ヲ扶植シテ普國ノ統一事業ヲ妨ケムト欲スルノ意アリ以上ノ趣旨ニ本キ露帝ハ墺國政府ニ十分ノ援助ヲ與フヘキヲ約シ四月其ノ將パスケウイ

ツチヲシテ大兵ヲ引ヒテ洪加利ノ北境ニ屯集セシメ五月露軍ノ一隊ハ遂ニ進ミテ洪加利ニ入レリ是ニ至リテ洪加利ノ政府ハ未ダ猛カニ其ノ抗戰ヲ撤セズト雖ドモ而モ其ノ戰ノ遂ニ利ナキヲ察シテ失望猜ノ兵ヲ知ラザリキ

（十七）

墺相スワルゼンベルグハ露墺二國ノ同盟ノ將ニ成ラムトスルヲ視テ素ヨリ決シテ普王フデリツク、キーオーム四世ガ日耳曼帝國統一ノ企圖ヲ妨害セント欲シ四月ノ始メ墺國政府ハ普ニ「フランクフオート」ノ憲法ヲ認メズ且ツ日耳曼議會ニ出席セル墺國ノ代議士百二十一名ニ議會ヲ去ラムコトヲ命シタル旨ヲ宣言シ次ヒテ更ニジヤン大公ニ向ヒテ其ノ同

盟曼総督ノ職ニ因テムコトヲ勸告シ普王ガシヤン大公ニ代リテ日耳曼強將タルノ權利ヲ否定シスタスルリング ナル者ヲ依林ニ送リ普王ニ見ヘテ墺二帝ガ王ノ日耳曼皇帝ノ位ニ貶リコトヲ欲セザルノ意ヲ傳ヘシメシガバ普王ハ二帝ノ意ヲ解リテ國中ノ輿論ト新タニ一番設セル普國代議院ノ希望ニ背キテ日耳曼皇帝ノ位ニ貶リコトヲ辭スルニ決シタルモ而モ其ノ帝位ヲ辭スルハ寧ロ君主政体ノ尊重スルノ旨趣ニ出デシ者ニシテ眼鏡誘君王ノ如ク雲ヲ日耳曼ヲ統一スルノ志ハ敢テ之ヲ拋棄シニアラザルヲ宣言シタリ然レドモ王ガ此ノ如ク躊躇ノ志ヲ達セムコトハ猛

カニ得テ望ムベキニアラズ他ナシ日耳曼人民ノ希望スル所ハ民主權ノ旨義ニ本キテ一ノ基ヲ創立スルニ在リテ也ヨリ普王ノ位置スル所ハ大ニ其ノ陣ニ異ニシタレバナリ

日耳曼人民ハ普王ノ変心ヲ聞キテ大ニ失望シ之レガ為メ聯邦ノ各地ニ於テ暴動ヲ起シ騒乱ヲ企ツル者陸続陸續ヲ掠シ詐欺ノ人民皆其ノ君主ト迭リテ フランクフオール憲法ヲ承認セシメムト欲シタルニ諸邦ノ君主中其ノ意ヲ棄テ顧ミザルナル者ハ多数ノ人民ノ要求ニ屈從セリト雖トモ其ノ他ハ堅ク之ヲ抗拒シテ力メテ時日ヲ遷延シ以テ普国ノ救援ノ至ルヲ待チ索遜王及ビハノーブル王ノ如キ亦五月ノ始メニ方リテ数日ノ間其ノ人民ニ抵抗シタルノチ普国ノ軍兵ヲ招致シ其ノ銃砲ノ力ニ由リテ辛ラシテ各ニ其ノ国内ノ秩序ヲ復立スルヲ得タリ而シテ普国政府ハ二王ガ其ノ救援ヲ求ムルノ切ナルニ乗シ五月中旬ニ迄リテ相倶ニ一ノ同盟ヲ訂結セシメ此ノ同盟条約ハ世人呼ビテ「トレーデンデンバウアー」三王條約ト為シ其ノ利益ハ王トシテ普国ニ帰スベキ者タリ

此條約ノ旨趣及ビ効力ハ後章ニ於テ詳カニ之ヲ解説セムト欲ス唯ダ爰ニ一事ノ注意スベキハ當時普王ハ其ノ兵力ヲ以テ日耳曼ノ諸君主ガ革命ヲ鎮壓スルヲ助ケ仍テ其ノ歓心ヲ収メ其ノ投票ヲ獲テ日耳曼ノ帝位ニ上ホラムト欲シタルコト是レナリ故ニ王ハ フランク

フオールノ議會ガ同ニ矯激ノ言動ヲ事トシ
益ト日耳曼人民ニ向ヒ其ノ新タニ制定シタル憲
法ヲ擁護スルカ為ノ兵ヲ起サムコトヲ令シタルヲ
視テ五月ノ末ハ至リ公然議會ノ措置ヲ非
認シ久リ既ニシテ墺國ノ代議士ハ相引ヒテ議
會ヲ去リ而シテ普國ノ代議士モ亦皆之ニ倣ヒ
シヨリ結束ノ代議士ノ議會ヲ去ル者陸續踵ヲ
接シ少数ノ民主党ノ外ハ復タフランクフオールニ
留マル者ナク彼等ハ其勢力日ヲ逐フテ漸ク
衰退スルヲ視テ益ト其ノ激昂ノ心ヲ大ニセリ彼
ノガゼルンノ如キハジヤン大公ガ其ノ意見ヲ納
レザルノ故ニ曾テ内閣ヲ去レリト雖ドモ
五月十九日民主党ノ議員ガジヤンノ総督職

ヲ罷ムルノ議ヲ提出スルニ及ビテ亦其ノ同志
ト倶ニ議會ヲ去リゴタニ於テ別ニ一ノ議會ヲ
開キタルモ久シカラズシテ之ヲ解散セリ右ノ如ク
ナルヲ以テフランクフオールノ議會ハ其ノ議員ノ
数次第ニ減シテ纔ニ一百五人トナリ次ヒテ普國
ノ軍兵ノ劫カスヿ吹トナリテスタットカルドニ移リ
数日間同地ニ開會シモ六月十九日ウユルタルベル
グ政府兵カヲ以テ益ト之ヲ解散シタリ當時西
部日耳曼ハ大ニ民主党ニ同情ヲ表シ来国地
方ハ共和党ノ巣窟トナリ騒乱絶ユルコトナリ
バード大公ノ如キハ益ニ其国ヲ逃走スルニ至
リタルモ普國ノ軍兵ハギーオーム親王ニ引
率セラレテ同地方ニ赴キ六七ノ二ヶ月間ニ悉

ク民主党ノ騒乱ヲ討平シ更ニ八九月ノ交ニ
大ニ厳刑ヲ施行シテ西部日耳曼人ノ人心ヲ
摺伏シ普國ノ軍兵ハ進ミテコローニユヨリカルハ
スリユヒニ至ルノ間ノ叛徒ヲ征服シテ莱国ノ沿
岸ニ散布シ其ノ狀恰モ佛國ニ恐迫ヲ加フル者
ノ如ク而シテ普王フレデリック、ギーオームハ全日耳
曼ニ向テ其ノ素ノ欲スルガ侭ニ制令ヲ下ダス
コトヲ得ル者ノ如クナリキ
顧フニ普王若シ大志雄略アリテ又真ニ英武漢
ノ資ヲ具フルノ人ナラムニハ必ズヤ其ノ年功ノ
彼レカ如クナルニ乗シテ日耳曼統一ノ大業ヲ
挙クルコトヲ得タリシナルベシ然レドモ王ハ
人トナリ優柔不斷ニシテ好ミテ論義ヲ事トシ

実行ハ其ノ長スル所ニアラズ加フルニ王ハ當
時丁抹ニ於テ一大失敗ヲ招キタルヨリ其ノ意
氣沮喪シテ復タ策ノ出ツル所ヲ知ラザルニ
至レリ是ヨリ先キ普王ハ其ノ兵ヲ進メテ丁
抹ヲ攻撃シ、ニ丁抹王フレデリック七世ハ英
佛諸國ノ間接ノ援助ヲ獲テ極力普軍ニ
抵抗シ交戦三ヶ月ノ後チ七月六日普軍ハ
フレデリシヤー附近ニ一大敗衂ヲ取リ仝月十日
普國政府ハ仲裁諸國ノ勸告ニ由リテ丁抹ト
倶ニ媾和條約ヲ訂結スルヲ諾シ先ツ休戦條
約ヲ結ビテ爭議ノ全ク決定スルニ至ルマテ瑞典
ノ兵ハスレウッグノ北部ヲ占領シ普國ノ兵ハ其ノ
南部ヲ占領スヘシトナシ而シテ丁抹王ハ同州

ニ對スル權利ハ依然トシテ之ヲ存留シメリ

（十八）

此ノ時ニ方リ墨露ノ軍兵ハ洪加利ニ進ミテコストノ徵募シタル軍兵ト戰ヒシガ交戰二ケ月ノ後チ洪加利ノ軍屢バ敗衂ヲ取リコストハ其ノ遂ニ支フ可ラザルヲ視テ八月十一日總統官ノ職ヲ辭シ其ノ後チ二日ヲ經テ洪加利ノ將ゴールジエーハ露軍ノ逐ル所トナリ ウイラゴスニ於テ其ノ部下ノ兵ト俱ニ降ヲ露ノ軍門ニヒ當時露將パスケウイッチハ書ヲ露帝ニ贈リテ言ヘリ洪加利ハ今ヤ陛下ノ脚下ニ在リ』ト勢ヒ此ノ如クナルヲ以テ叛徒ノ首領ハ除ネ逃レテ土耳格ニ走リ洪加利ハ全ク其ノ独立ノ望ヲ失フテ再ビ

屈伏セリ

洪加利独立ノ失敗ト相前後シテ更ニ伊太利革命ノ失敗アリ墺國ハアルプノ内外ニ於テ同時ニ二大勝利ヲ獲タリ但ダ夫レ果モ奇トスベキハ其ノ洪加利ヲ破フルニ專制國タル露國ノ援助ヲ獲タルニ反シテ伊太利ノ民主旨義ヲ討平スルニ共和國タル仏國ノ援助ヲ得タルコト是レナリ

伊太利ニ於テハノヴールノ戰ノ後チ專制政ハ再ヒ其ノ勢力ヲ回復シ四五月ノ交ニ於テナポルプル王ハ三タビ其ノ議院ヲ解散シテ一八四八年二月十一日ノ憲法ヲ中止シ再ビシシル島ヲ征略シテ其ノ兵ヲシテ大ニ劫掠ヲ恣マニセシ

ノ而シテ之ト同時ニ非革命党ハブロランスノ
共和政ヲ顛覆シテ墨国ノ兵ヲトスカーヌニ拒
致セリ然レドモ羅馬ノ共和政府ハ尚ホ其ノ
存立ヲ全クシ而テ其ノ能ク存立ヲ全クスル
ヲハピエモンモ亦媾和条約ノ調印ヲ拒ムコ
トヲ得ザリシ時ニ至ルマテ弾丸シテ墨軍ニ抵抗
セルヴニースモ亦其ノ勝利ノ望ヲ繫クコトヲ
得タリシモ奈何セム此時羅馬ノ共和政
府ハ確ダニ墨国ノ[illegible]カカスト[illegible]トナレルノミナラ
ズ更ニ仏国ノ共和政府ハ確ダニ[illegible]ノ[illegible]ヲ救
フニ由ナカリシコトヲ蓋シ此時ノ仏国政府ハ
大統領路易拿破烈翁ノ首ノ墨国ガ中央
伊太利ニ於テ独リ其ノ勢力ヲ増ス[illegible]ヲ欲セ

ズ又マジニーノ創立ニ係ル羅馬ノ共和政ヲ認
スルヲ欲セズ故ニ其ノ兵ヲ出タシテ伊太利ノ事
ニ干渉スルニ決シタルハ其ノ実共和政府ヲ扶
立スルガ為メニアラズシテ適ニ自国ノ兵力ヲ
以テ之覆ヘシテ墨国ノ勢力ヲ抑ヘムト欲スル
カ為メニ外ナラズ而シテ当時仏国外閣ヲ総
理シタルハオヂオンバロー[illegible]ナリシガ[illegible]ト主
トシテ其ノ局ニ当レル者ハ耆教党ノ首領
中最モ矯激ナルフアルー伯ニシテ大統領路
易拿破烈翁ハ徒ニ耆教党ノ援ニ乗ジテカ
ヴエーニャウクトノ競争ニ克チ而シテ此時ヨリ既ニ
其ノ内心ニ仏国シタル帝政ヲ創立スルニハ更ニ
耆教党ノ援ニ待ツ所ナカルベカラザルヲ憑カリ

加フルニ立憲議會ハ其ノ會期將ニ尽キムトシ
新タニ施行スベキ立法議會ノ總選擧ニハ宗
教ノ勢力ヲ為ホスコト勿ナカラザルヲ察シ百
方手段ヲ竭クシテ舊教党ノ歓心ヲ收メムコ
トヲ求メリ勿論當時ノ立憲議會ハ眞個
ニ共和青義ヲ抱持スル者其ノ多數ヲ占メタ
ルヲ以テ拿破翁タル者立憲議會ノ解散ヲ
待タズシテ猝カニ其ノ位置ヲ脱スルハ頗ル無謀
ノ擧タルヲ免カレスト雖モ時機甚タ切迫シテ
一日モ緩フスベカラズ是ニ於テ拿破烈翁ノ狡獪
ナル一策ノ詭計ヲ案出シテ其ノ困難ノ境遇ヲ
脱セムト欲シ而シテ丈夫ノ所ハ果シテ効ヲ奏
スルヲ得タリ

ヨリ先キ仏議會ハ「ヴール」ノ戦報ヲ聞
キテ憂悲ニ堪ヘサルノ狀アリ拿破烈翁乃チ此
機ニ乘シテ議會ヲ奮誘シ三月二十日ノ議場
ニ於テ下ノ如キ演説ヲナシメタリ云ク「改
府ハ若シ「ピエモン」ノ版圖ヲ保全シ仏國ノ名
譽ト利益トヲ主持スルガ為メ一対伊太利ノ
一地方ヲ占領シテ其ノ談判ヲ援クル須
要ナリト思料スル時ハ議會ハ丈ノ全力ヲ傾ケ
テ政府ノ措置ニ協賛ヲ與フベシ」ト次ヒデ四月
十八日ニ到リ拿破烈翁ハ右ノ演説ニ基キ軍
ウーデノーニ一軍ノ兵ヲ與ヘテ「ヴィタ、ヴェクシヤ」
ニ派遣セムト欲シ之ニ要スル經費ヲ議會ニ
請求シニ議會ハ直チニ要求ノ支出ヲ諾シ

シタリ然レドモ議会カ兵ヲ伊太利ニ出スコトヲ
拒シタルノ点ハ甚ダ羅馬ノ兵和蘭府ヲ類
似スルガ故ニアラズ故ニ議会ハ四月末ヨリ九月
シヴィタ、ヴェキヤーニ上陸シタル独軍ウーヂノー
ガ其ノ兵ヲ羅馬ニ進メ同月三十日同市ヲ攻
撃シテ大敗ヲ喫ケタルノ報ニ接シ驚愕措
ク所ヲ知ラズ又月七日和蘭府ニ向テ伊太利ノ出
兵ガ其ノ豫メ接受シタル目的ニ達スヲ拒ガ
為メ速カニ和蘭ノ指揮ヲ施コナムコトヲ求ム
ノ抗議ヲナシタリシモ今ヤ破烈翁ハ毫モ議会
ノ抗議ヲ顧ミズ其翌日一隻ノウーヂノーニ送
之ニ有力ナル援兵ヲ送ルベキヲ告ゲテ其戦ヲ
継続スベキヲ厳シタリ

況ンヤ立法議会ハ選挙ノ時様漸ク揺ラ
而シテ其ノ選挙ハ当時ニシテ多数ヲ得セ
シムルノ勢アリシモ今ヤ破烈翁ハ為ス或ハ及
ボノ強果ヲ生セムコトヲ恐テ之ニ備フルノ
計ヲ怠ラズ羅府ト倶ニ談和ヲ希ク為メニ
ド、セップス（特使トシテ同地ニ派遣シタリ）ハ合ヲ破烈翁ニ
会シタリド、セップスハ
今ヤ破烈翁ノ権勢ニ使用セラルヽヲ恐ラズ五月
十七日ニ三十一日ニ亜ジニート倶ニ講和ニ従
ヲ講キタルニ対シ
事ジ攻撃ノ備ヲ整ヘ而シテ四月下旬以来既
ニ法国領ニ侵入シタル墨国ノ兵ハ進ミテ
コーヌニ達シ亜班牙及ビナープルヨリ派出シタ
ル軍兵モ亦南方ヨリ法国ニ侵入セリ既ニ

シテ仏使ドレセップスハ共和政府ト倶ニ一ノ妥
當ナル協約ヲ遂ケ安和政府ヲ仏兵ノ保護ノ
下ニ置キ而シテ仏兵ハ後ニ羅馬ヲ占領スルヲ
得ベカラズト定メタリ然レドモ爲政烈翁ノ演
シタル嫉刻ハ此時ヨリ已ニ其ノ終ヲ告ケ六月
十八日ニ施行シタル仏国ノ總選擧ハ吉田党ニ
大多數ヲ與ヘタルヲ以テウーディノーハ直チニ羅馬
ヲ攻撃スルノ命ヲ受ケドレセップスノ定メタル
協約ハ仏国政府ノ非認スル所トナリ六月一日仏
軍ハ進ミテ羅馬ヲ圍セリマジニー及ビ其ノ
同僚ハ其後チ數日ノ間仏国ノ兼ビ共和党ガ
其ノ勢力ヲ得ルノ日アラムコトヲ望ミタルモ六
月十三日ルドリユー、ローラン一派ガ騒乱ヲ起シテ

失敗シタル後チハ其望ミ全ク絶エテ唯々其
名譽ヲ憐フガ為メニ抗戰シ二過ギズ既ニシ
テ六月末九日仏軍ハ遂ニ城門ヲ破リテ市内
ニ侵入シ二千兵ハ多クハ能ハズシテ城ヲ捨テ、
逃レ七月二日三頭領ハ殘ル厳メガリバルヂー
ハ殘兵數千ヲ引ヒテアプナン地方ニ走リ更ニ僕
軍ノ撃破スル所トナリテ四方ニ潰散シ其ノ翌
日仏ウーディノーハ羅馬ニ入リテ法王政府ヲ
復立シタリ然レドモ法王ピー九世ハ翌年ニ至
ルマデ羅馬ガエートニ留リテ羅馬ニ還ルヲ肯
セズ且ツ該国會議ノ抗議ヲ顧ミズシ
テガエートヨリ遂カニ其ノ相アントネリーノ保
守政軍ヲ指揮シ日ナラズシテ其ノ領内ニ

於テ グレゴアール十六世時代ノ專制政治ヲ復
立シタリ其ノ如クナルヲ以テ仏國政府ノ情亦ハ
使ラニ墨国ノ政策ニ利益ヲ與フルニ止マリ該国
拿破烈翁ハ妄リニ羅馬ノ共和政ヲ敗壞シタ
ルガ為メ兵ヲシテ永ク国市ヲ占領セシムルノ已ム
ヲ得ザルニ至リ遂ニ自家一身ノ野心ヲ滿
足セシメムト欲シテ至大ノ過失ヲ犯シ而シテ
其ノ過失ノ應報ハ二十年ノ後チ其ノ頭上ニ
降落シ旋キテ仏國ヲシテ国辱悲慘ノ窮
境ニ沈淪セシメタリ
且ツ拿破烈翁ハ此時ヲ以テ極メテ拙劣ニシ
テ又且ツ矛盾ヤルノコト能ハズ而シテ他日大
ニ其身ヲ禍ヒスベキ首尾紊亂而濁ノ政策

創始シ一方ニハ中央伊太利ニ於テ墨国ト力
ヲ戰セテ軍金吉義ノ排撃スルト同時ニ
他方ニハ援ヲピヱモンニ假シテ自由及ビ独立
ノ旨義ヲ扶植セムコトヲ計レリ故ニピヱモン
王ヴイクトル、エマニユエル一世ガ甚シキ不利ヲ被
ムルコトナクシテ一八四九年八月六月墨ト倶ニ
媾和條約ヲ訂結スルヲ得タルハ拿破烈翁
ガ兼ネト計リテ者ニシテピヱモンノ
為ヲ表ス能ハザリシピヱモン王ハ此条約ニ
テ其ノ領土ノ部ヲ保有スルヲ得墨ハ
唯ダ二ニ七子ニ五萬「フラン」ノ償金ヲ要求シ
ニ過キズ且ツピヱモン王若シ其ノ又ノ制定

セル一八四八年三月ノ憲法ヲ廃スルコヲ諾
スルトキハ僕ハ其ニ貢ノ償金ノ要求額ヲ
低減スベキ望アリシモヴイクトル、エマヌエル
ハ伊太利半島中自己ノ領土ヲ除クノ外、
都テ外国ノ支配ニ帰シテ専制ノ制度ヲ
復立スルノ時ニ方リ獨リ其ノ国ヲシテ自由
ノ栖処トナカムト欲シ遂ニ其ノ憲法ヲ廃
止スルヲ肯ムセズ而シテ是ヨリ以降伊太利
ノ獨立党ハ皆貢ノ望ヲピエモン王ニ属シ後日
ニ伊太利統一ノ大業ヲ等スコトヲ得タリ
然レドモ此ノ時ニ於テハ其ノ報復ノ時期猶
ホ甚ダ遼遠ナルノ観アリテ独立党ハ姑ク
怨ヲ呑ミテ墺国ノ前ニ其ノ頭ヲ屈セサル

ベカラズ而シテ墺ハトピエモントノ媾和ハ恰
モ其ノ最後ノ保堅ヲ撤去シタルニ均シク
ヴニーズハ此ノ時ニ至ルマデ死力ヲ竭クシテ
墺国ノ陸海二軍ニ抗戰スルコト十八ケ月ノ
久シキニ亘リタルモ此ニ至リシ何レノ国ト
雖ドモ之ニ救援ヲ與フルノ望ミナク総統官ミ
ナンハ事ノ蹙ニ為スベカラザルヲ知リテ其職ヲ
退キ八月ホニハ敵軍ノ市内ニ入ルノ間ニ逃レテ
他国ニ走リ而来貧困支フルニ由ナリ遂ニ貢
ノ本国ノ独立ヲ見ルニ及ハズシテ病ミテ殁シタ
リ
一八四八年ノ革命ノ大変乱ハ以上述フルカ如ク
シテ貢ノ局ヲ結ベリ貢ノ激昂彼レガ如ク貢ノ

反抗

彼レガ如クナリシ人民ハ諸國ノ一八四九年ノ

而シテ其業望ヲ彼ニカラシム

下半期ニ至リ悉ク君主ノ征服スル所トナレ

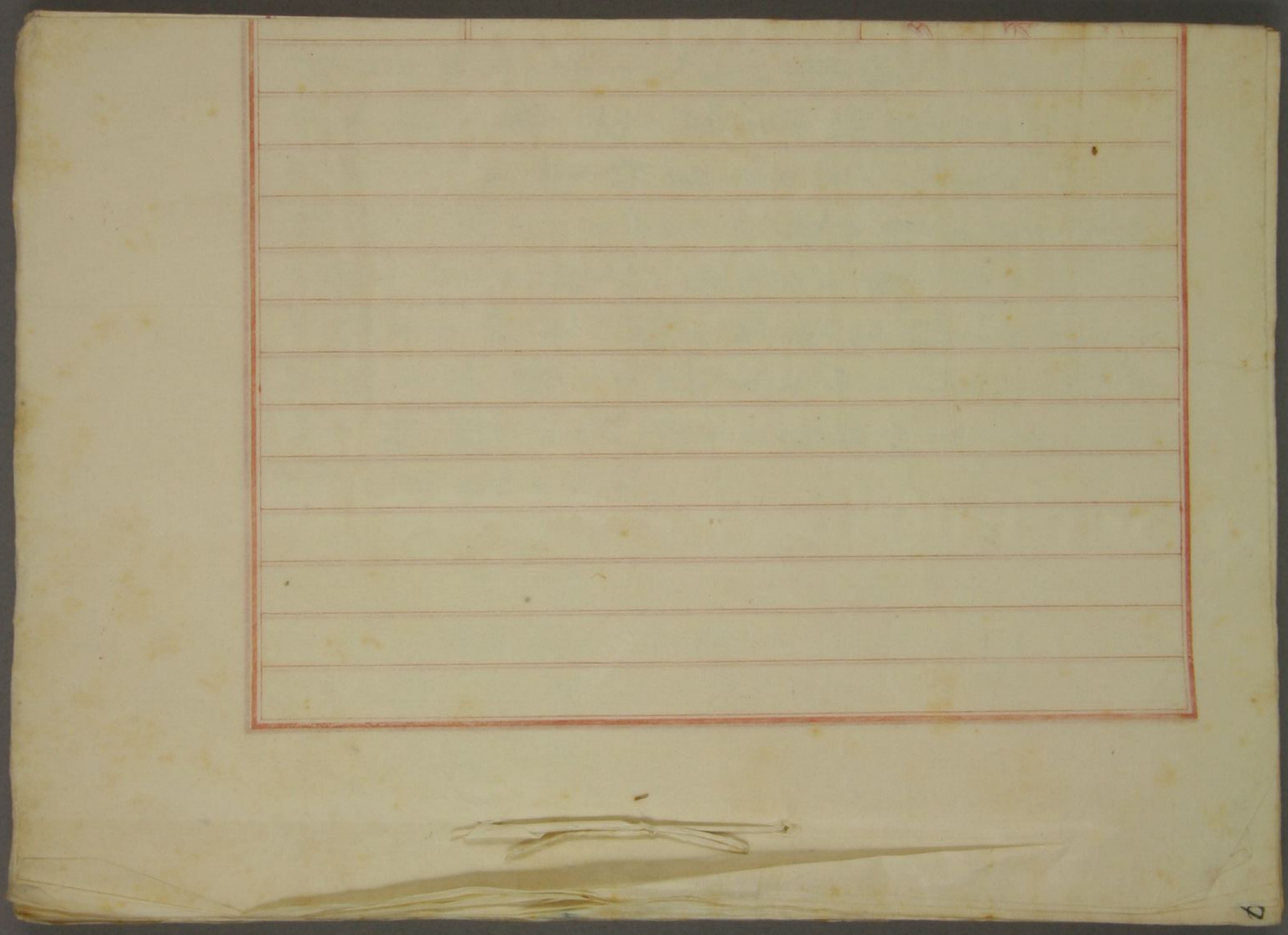
リ然レドモ當時君主ガ貢ノ人民ニ對シテ

勝利ヲ得タリト言フハ是レ唯ダ貢ノ外觀

ニ過キズシテ砲火ハ辛ラシテ其ノ跡ヲ歛メリ

ト雖ドモ外交ハ猶ホ至重至難ナル幾多ノ

問題ヲ解釋セザル可ラズ而シテ其ノ能ク

之ヲ解釋スルハ須ラク自由独立ノ旨義ニ

據ラザルベカラズ